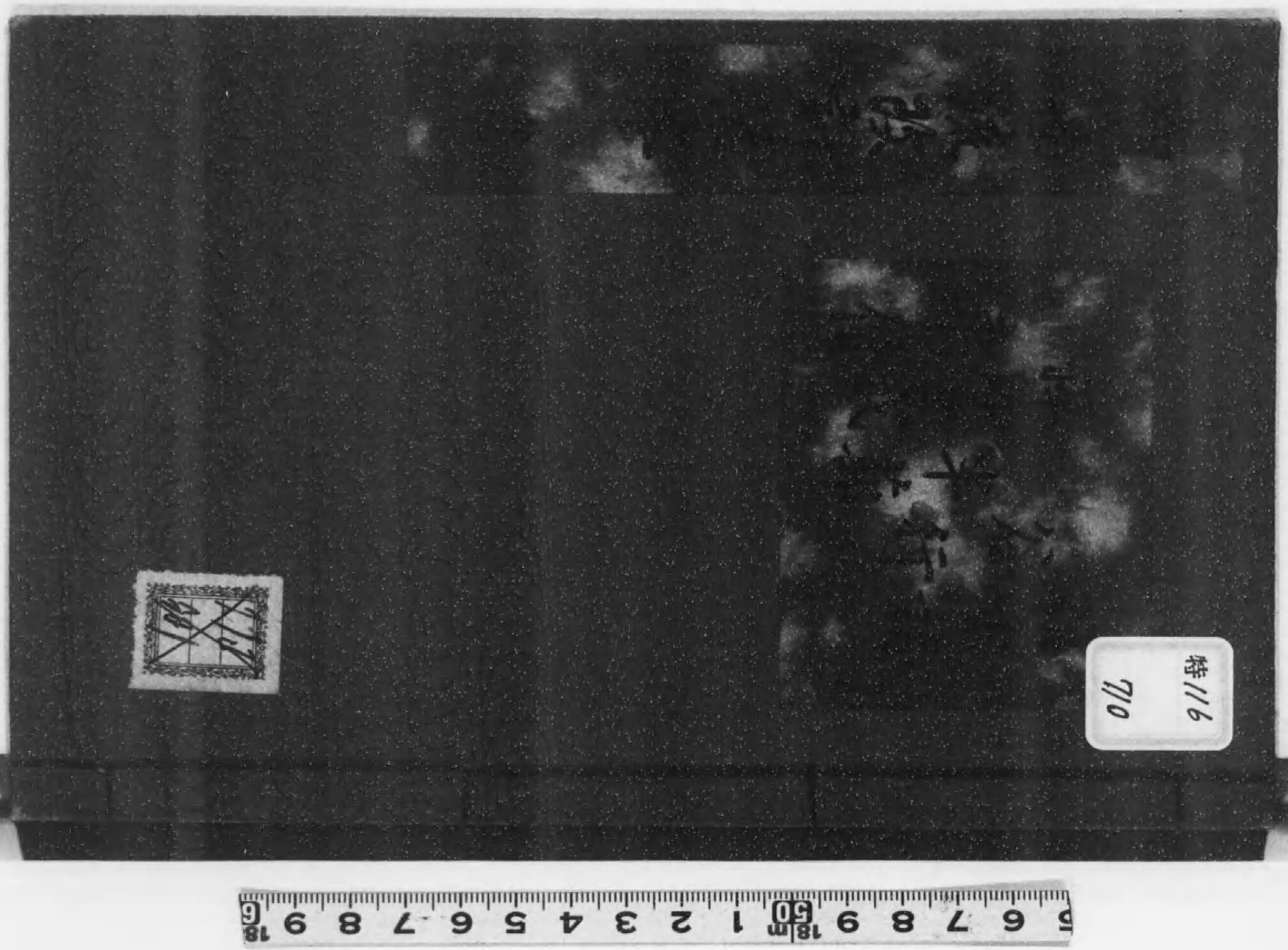


特116
710

昭和
18.12.1

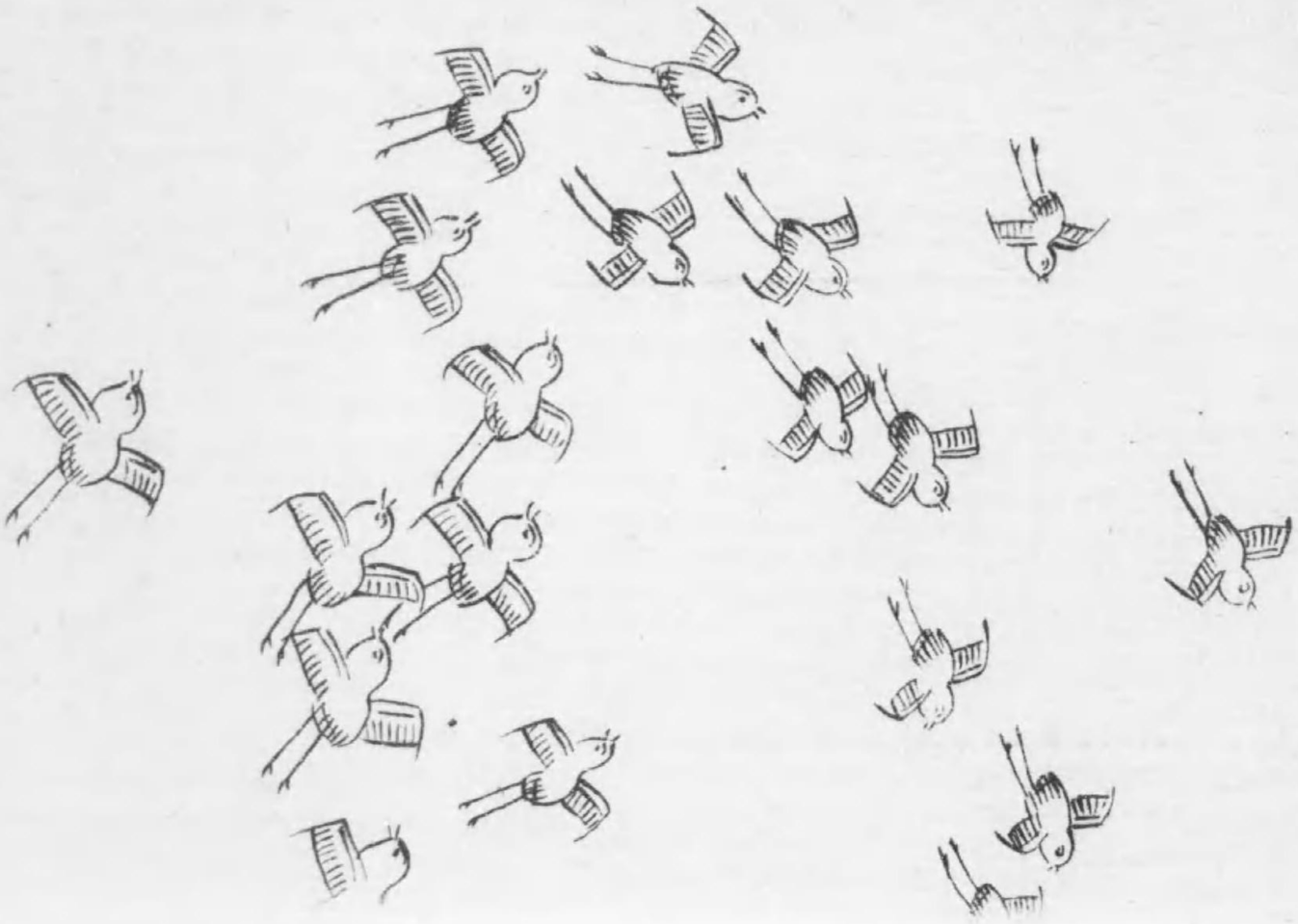
18cm 50

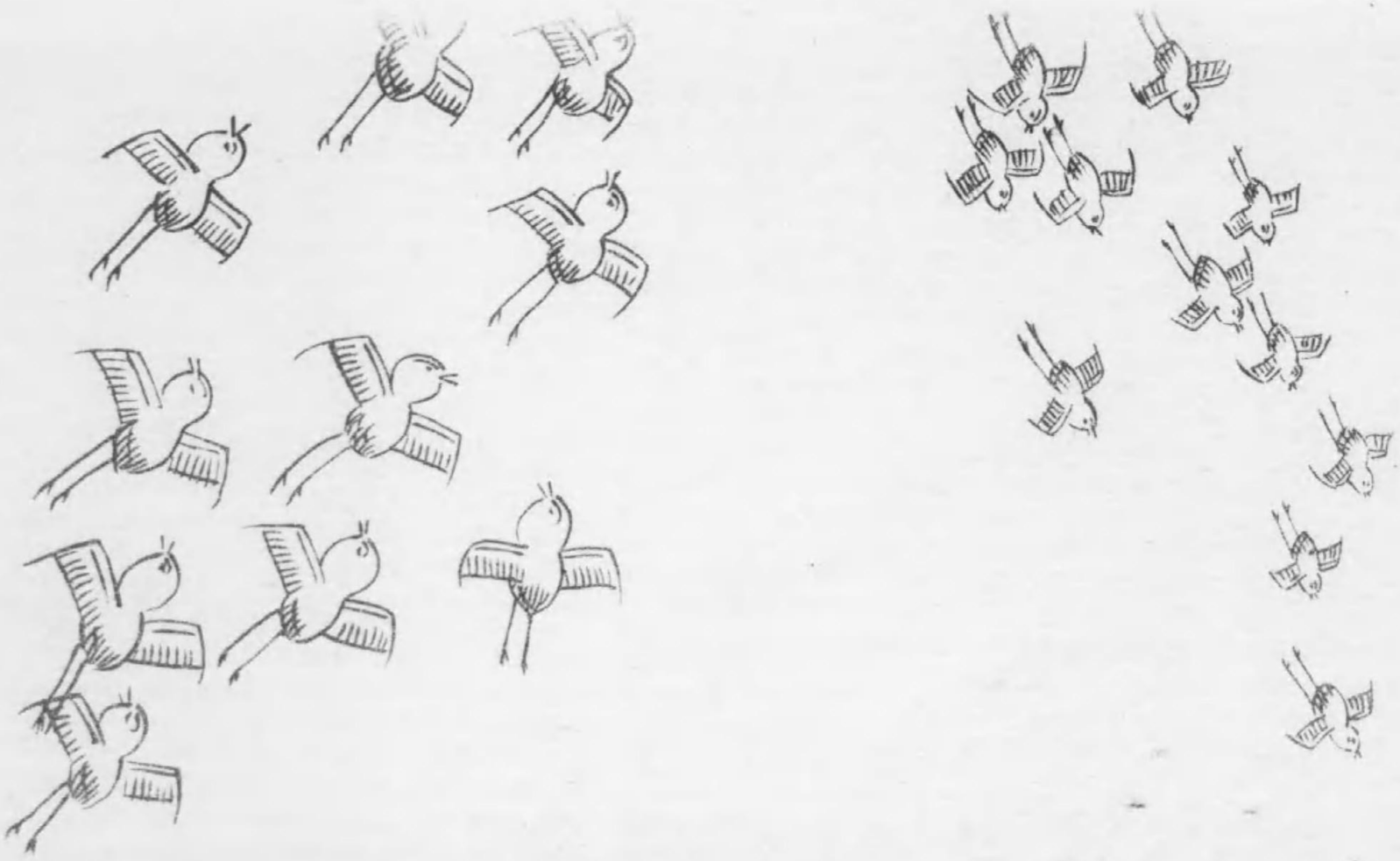
觀世流改訂謠本

外六

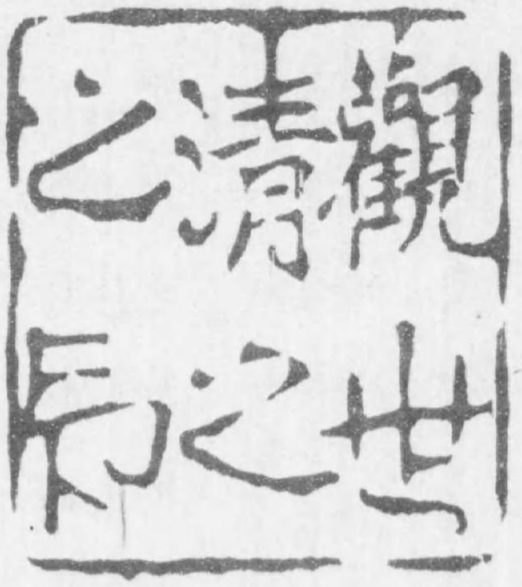
位吉詣
谷行
半蔀
禪師曾我
車僧

特116
710





4冊116
710



文學博士

明治四十年

井上頼圀 本文監修
丸岡桂 本文訂正
観世清之 節附訂正

大正五年

丸岡桂 解題并補訂
山崎楽堂 拍子附訂正
観世流改訂本刊行會 節附様式統一

大正十年

山崎楽堂 拍子附再訂正

住吉詣

解題 紫式部が書きたる平安朝の長篇小説源氏物語の一節につきて作れる所謂源氏物の一なり。一年源氏の居枝ありて左遷せられ久しく須磨明石に在りしが厄解けて都に歸り、内大臣となりて世に時めくに至り、須磨にて歸洛を祈りし願果しの爲住吉明神に詣でしに、ちうしも同じく住吉に詣でし明石の上に廻り遇ふ。明石の上は源氏の居の明石に在りし時契りし明石入道の女なり。同じくこれを作れる廢曲に澪標(みをつくし)あり。又明石にて旅僧が明石の上の亡靈に逢へることを作れる明石上あり。

謡ひ方梗概 全曲扇箱卷を展べたる如く優美しかるべきものとす。**明石の上** 出雲の姿を表すに方む。**出の一聲**はやい花やかにのびゝと大きかるべく、**惟光**との掛合は「あら恥かしや」云々をしとやかに往を持ちて謡ひ、地渡し前の「白露の」を前へかけるやうに出づ。**ロンギ**は艶情有るやうなるが宜し。**舞後**の「身をづくし」云々はゆるやかにたつぷりと扱ひ「數なきうで」云々は歌を口ずさむ心持にてやさしく出で「互の心を」より氣を變へて大乘に乘る。**源氏**とあらべし。**惟光**は黄之の如き若なれは、ソレの中にては最も往を持ちて確りと謡ふ。「小車の」の一聲は立衆との連吟なれども、素謡にては惟光のみにて謡ふも可なり。**隨身**花やかにさらりと扱ふ。**立衆**能惟光に從ひて謡ふが宜し。**侍女**斯か島めに引き立てゝさらりとあらべし。**神主**稍往有りて靜に確りと扱ふ「灌上再拜」以下の祝詞は取り分き大事に確りと謡ふべきものなり。**地**初の**上歌**はゆらりとして滯無かるべく、「東こ方の」云々は明かなるべし。「千代萬代の」云々は變へて謡う高本らめやらに出で大乘に乘る。「舟出せし」云々この**上歌**は「東こ方の」上歌ようも確りめの心なり。此上歌はシテ、ソレ連吟しても宜し。「玉藻」云々は稍進む氣味に扱ひ**ロンギ**は長を變へてさらりと、「鮮に引かる」云々は承けてむつくりと謡ふ。「廻りあひける」云々はゆるやかに「入江の鶴も」以下は晴れやかに暢びゝとあらべし。

辭解 **住吉** 摂津國東成郡住吉村に鎮座せる住吉神社。**菊園** 住吉の神主七家の一なる拍氏の支族。こゝには假に其名をかりて作る。**光源氏** 源氏物語の主人公。桐壺帝の御子。此曲に作れる所は同物語澪標の卷に悉し。此時源氏廿七歳。**社人** 神社に奉仕する人。**小車** 小は從者車といふに同じ。輦も優くゝは繪畫たるさま。**直に** 街路の通過せるとし、政道の正しきとを云ひ兼ぬ。**思ひ立つ** 旅衣の縁にて立つ(裁つ)等きといひ後く。**白鳥の** 飛ぶ意にて馬羽に冠する枕詞。日ざしも白むと承く。**戀**

塚 京都郊外下鳥羽にあり。袁淡海前の首を埋めたる塚と言ひ傳ふ。**秋の山** 周防国鳥羽の名勝。秋の緑により淡を隔て、月を出す。**山崎** 山城国乙訓郡の南張にして国境の地。月の影を隔つる山と云ひかく。**関戸の宿** 山崎の西。**芥川** 摂津国三島郡の芥川を貫流して淀川に注ぐ川。摂津国河辺郡猪名川畔の猪名の笹原と称ふ。新古今集の歌「薄霧のたちまふ山のもみぢはは さやかならねどそれとみえけり」によりて際る。村紅葉は群がれる紅葉。**猪名** 摂津国河辺郡猪名の笹原と称ふ。**交野** 河内国北河内郡かすが古の遊猟地。又楠の名所。**渡邊大江の岸** 渡邊は古の難波江の船津。今の大阪市天満天神祠橋附近。大江の岸は今の天満橋南詰八軒屋附近。後拾遺集に「渡の邊や大江の岸に宿りして」、又堀河百首に「渡の邊の大江の岸は引たさゞりけり」などあり。或は芦刈の道行に「なにはの江の来は渡邊や大江の岸も移りゆく」とあるを借り来れるにや。**音立てかへて** 云々 さわがしき波の音も一変して澄むと言ふを住吉にかく。**浦わ** 湾曲したる浦。**いさぎよき** 清き。**瑞籬の** 云々 水の音を聚けて瑞籬を出し、伊勢物語に「神現形し給ひて」と詞書して出でたる歌「むつまじと君はしらなみ瑞籬の久しき世よりいはひそめてき」に詞を借る。瑞籬は久しの枕詞。**和光同塵は** 云々 摩訶止観に「和光同塵結縁之初、八相成道」以論其終」。仏菩薩が其威光を和げて世塵に交ちは衆生と結縁すなはちなり。八相は仏が此世に現れて示す八種の相の推移。こゝには利物の果といひかけて詞を轉せり。**祝詞** 神に申上ぐる詞。**謹上再拝** 神を礼拝する慣用語。**すべらめ** 鎮め清むること。**八人の八少女** 云々 神通右目類聚抄に「八乙女と云ふは正八人つとむる事あり。是を云ふとも云へり」。又「神楽男神楽の事に預る後人なり。五人の神楽男といふは八乙女と云ふに対して云ふなり」と見ゆ。**颯々** 風の少く強きをいふ詞なるを、風に鳴る鈴の音に取りなせり。**丁々** 五人の神楽男といふは八乙女と云ふに対して云ふなり」。なるべし。**鈴の聲** 丁々と打つ音の鼓も。**榊葉** 神楽の曲名。**久方の** 天に冠する枕詞。**幾久しく** 幾久しといひ次ぐ。**皆令満足** 一切の所求を満足せしむ。薬師経に「隨心所願皆令満足」と訓ずにし「皆令満足」うたがはず」などあり。**来し方の御願** 前に記しなる光源氏の願磨にて立てたる願をいふ。澪標の巻に「まことに神の妻びたまふべきことをしつくして、来し方の御願ばかりあかし給ふ」。**河原の大臣** 云々 澪標の巻に「河原の大臣の御別をまねびて童遊

身を大まはり給ひける」とあるに據る。此事は御堂関白道長が内裏より童殿第六人を賜はりたることあるを、紫式部が河原の大臣の事として作りなせるなり。河原の大臣は嵯峨天皇の皇子左大臣源融が六條河原に住みけるより世に呼びなせる名にて、謡曲融に作られたる人なり。**うち** 内裏を呼び奉る詞。**童隨身** 童子の従者。古へ朝廷より護衛の為持に貴人に賜はりし一種の和歌の体。**朗詠** 詩歌の句に節を附けて謡ふ一種の謡ひもの。解。**一樹の陰や** 云々 平家物語に「千年の前重ねて、一樹の陰に宿りあひ、同じ流を掬ぶも是みな前世の契といふなれば」などとも見えたり。謡曲千手に「一樹の陰や一河の水、落こもと素拍子の謂にて楽器に合せずして歌ひ居の称なるべし。中古其謡ひものを白拍子といひ又これを謡ふ舞女をも白拍子といひけるを取り入れたるにや。**白拍子** 或は平家物語の原文により「数へけるを」と作りしを傳へ誤りしものか。**我見てし** 云々 伊勢物語の歌。古今集には第三句「住の江の」とあり。此歌**島**に出でたるよりこゝに借りたるものか。**めぐる** 云々 舞の袂のめぐるを盃の廻るにかけ、盃に月を宿すましめて有明と後く。終夜酒宴を催して有明に及びたる意。**ほのぐ** 舟の帆と承け古今集の歌「ほのぐと明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ」を胸にふまへて假る。**浦よりをちこち** 新後拾遺集の歌「朝夕に見れどもあれ住吉の浦よりをちの淡路島」。明石の海。以下明石を船出して東の方住吉に向ふ心なり。月待つ方山。淡路島。あはれと吾を重ね。**明石潟** 明石の上は光源氏の一女を懐妊せし以来住吉への年詣を怠りがちなるが、既に公娩したるより此日思ひ立ちて参りたるなり。**後の山** 以下の文、源氏物語須磨の巻の文に「おはします後の山に榊といふものふすぶちなり」。また「行平の中納言の『関吹きこゆらすまの浦風』の詠」。**おしてるや** 難波(今の大阪の地)の枕詞。**津守** 後りの意。住吉の津の意を兼ぬ。**松原の** 云々 澪標の巻に「松原の深緑なる中に花紅葉をこき散したるに見ゆる絶衣の濃き薄き数を知らず」。又「のこりて詠ぜ給へるそ」云々。のこりは吾聲を高く出すこと。此引文の後きに「内大臣殿の御願はたゞに詣で給ふて知らぬ人もありけりとて、はかなき程の下司だにぶちよげにうち笑ふ」。**上の空** 心の落ちつかぬ様にいふ詞。其空を承けて月日と後く。以下をりも、なりとて同じ月日に詣で来らんとは知らざりき

との意の、知らず白露にかけ、白露、露の玉、玉襷、襷かけ、かけも離れぬと云ひつゞ。かけも離れぬとはかけ離れぬ意。宿せは前世の縁。澪標の巻に「さすがにかけ離れ奉らぬ宿せながら」云々。なか

くに 却つて。**浦波の** 立ち又は歸るとは いはんか爲の序。**歸らば** 云々 澪標の巻に「歸らむにし中空なり。今日は 難波に船さしとめて被をだにせむと」云々。

き渡りぬ。中空とは 難波江の八十島にて、代始に御被の古例あり。**被** 被をも志(爲)といふを白波にかく。**忍ぶもぢずり** 云々 河原左大臣の歌「みちのく

物の中途半端のこと。**ぢずり** 淮敏にみだれむと思ふわれなれば」を合ス。**よそに調めの** 云々 源氏物語明石の巻に光源氏

くの忍ぶ。ぢずり淮敏にみだれむと思ふわれなれば」を合ス。歸京の時、明石の上琴を彈

くに」をかる。北邊の文**紅葉狩**の影響あり。**忘草** 云々 住吉の岸に生ひ、これを摘めばものを忘ると言ひ傳へたる草。光源氏が

ド て別を惜み、「なほざりにたのめむくめるひとことをつきせぬ音にやかけて忍ばん」、「逢ふまでのかたみ

にちぎる中の緒の調はことにかはらざらなむ」と歌を詠み交し、「この音違はぬさきに必ずあひ見むと

頼めたまふめり」と作れるに據る。江の岸にむふてふ恋忘草」、伊勢物語の歌「忘草植うとだに聞く

ものなくらば思ひけりとは知りもしなまし」などにて文を綴ず。**かねこと** 契約したる言。**なほざりに**

をつくし 云々 前に引ける明石の上の歌の詞。**惟光** 光源氏の侍臣。**傳** 主君の御守役。**面はゆ** 恥。**移り舞** 似せ得て舞ふ舞。**身**

住吉にて光源氏が明石の上に與へたる歌。身を盡しに澪標を兼ね、澪標は河海の深淺を知らしめんが爲に船路に立てたる標木。**數なくらで** 云々

明石の上の返歌。原歌は第四句「なにはのみをつくし」。人數にも入らぬ身にて **夕汐** 言ふの音を兼ぐ。風

何事につけても及びなきに何故身を盡しして思ひそめたりしかとなり。澪標の巻に「日暮れ方に

なりぬく。夕汐みちきて」云々。**入江のたづし** 云々 前引文の後きに「入江のたづも聲をしきるに」云々

たづは鶴。**露けさも** 云々 光源氏の別に臨みて詠み交ら歌「露けさの昔に似たる旅衣田蓑の島のな

の古歌。島は今詳ならざれど天王寺の西北方の海邊なりしかゝし。**牛の車** 古高貴の人の乘りたるもの。名殘も憂しと泣く。**のぼれば** 云々 古今集の歌「最

る稲舟のいなにはあらずこの月ばかり」を引きて、光源氏の都に上り、明石の上の明石に下る別を叙す。**舟をし** 云々 前の「ほのぐ」の解に出し

たる古今集の歌を引く。

四番目
畧三番

住吉詣

九月

神を祈

これは攝州住吉の神主菊園の何某

そもさても此頃都よりおいて參る程

無き光源氏ぞ。宿願の子細あつて。

當社に系詣て作せ出されい程よ。社人

どもを呼び出し。社内をも清め。其心得

をなすべき由申しつけぞやと存ぜ

ツレ　子方　童　惟光
ツレ　子方　隨身（能三人）
シテ　源氏ノ君光侍女（能二人）
ワキ　明石上
住吉神主

惟光立乗上 一声 小車の。轅も續く都路の。直よ浩
まる。時せかる 打上 惟光サシエ 打これい擧せよ
起え感光曇らぬ。光源氏とておち
まもさても此君頼をかけ。住吉の 惟光立乗 けふ思ひ立つ
神よ所願を満てんと
旅衣。薄き日影も白鳥の。鳥羽の窓
塚秋の山。過ぐれば いそぐ都の月の。

面影隔つる山崎や。閑戸の宿も。移
りきぬ 打切 下歌中 搆そぬ塵の芥川。猪名の
笹原分け過ぎて 打切ヤ・見渡せば。薄霧
まがふそなたより。 打切 薄霧まがふそなた
より。ほの見えそむる村紅葉。これや
交野よ狩り暮れて春見し花のそれ
ならん。 打切 猶行く先は渡邊や。大江の岸

よるの波も。音立て変へて住吉の浦わよるも程ぞなき。浦わよるも程ぞなき。

源氏ザシ上

ヨウク

同きーよ超えていよ〳〵ありがたき。神の誓も潔き。浦わの浪の端離の久しき代を守り給へ

●小謡

地上歌

●日の本の。神の誓はおしなべて。神の誓はおしなべて。和光同塵は。衣縁の

仰ぎ。相成道は利物のはたらきまで。國富み民を撫むる心を誰かは仰がざるべき誰かは仰がざるべき。

神主行

唯今の御系詣でたりは

惟光

さあらば

神主上

ツヨク

ノウト

いそぐ〳〵

祝詞を系らせられへ

祝詞を神主幣帛を捧げつ。

祝詞を申さんと。神主上

まで祝詞を申しけり。謹ぶ再拝。

故つて自ら神慮をまぐしめの神樂。
八人のハ少女。五人の神樂をのこ。鈴〻
の鈴の音。丁丁の鼓の聲ゞよ。風ふ
榊葉の神歌。幾久方の天地開闢。泰
平諸人快樂。福壽圓滿よ守らしめ
給へや。抑立つる所の諸願成就皆令
滿足ありがたや　地上歌　打切ヨワク　打切ヤ　来り方の願

願よ猶もうち添へて。願よ猶もうち添
へて。さもありがたき神慮の。内受も
かくやと感涙肝よ銘じけり。よく
悦びの盃。神酒よ賜びければ。とり
ふ一献供よ河原の。大臣の法例とて。
内裏より賜はる。童隨身其時よ。
お酌よ立ちて慰めの。今様朗詠も

●小謡

随身上
樹の蔭や。河の水　地　皆これ他
生の縁とこそ。白拍子をぞ奏でける
破掛リ中ノ舞三段　随身上
われ見ても。久しくなりぬ。まことよりの
地　岸の。姫松。幾代経ぬらん　上歌　千代萬
代の舞の袖。千代萬代の舞の袖。
いよ〳〵廻る。盃の。有明よりも。中つ
舟のほのぐ〵。明くる住吉の。浦より

▲明石上、侍女ノ連吟ニスルコトモアリ

明石上　侍女上（三人）一声
遠の淡路島。おもかげはてなきなごめ
なるおもかげはてなきなごめかな。
明石潟。月待つ方よ行く舟の。浪静
なる。浦の夕ひ　地上歌　舟出せん。後の山の
山嵐。後の山の山嵐。開吹き越えて
行く程よ。須磨の浦わもいつかよ跡
の名残もおしてくるや。難波へはよ寄

まるなる。波はさながら白雪の。津守の浦
よ著きよけり津守の浦よつきよけり

侍女上　松原の緑糸なる末蔭より花紅葉
を散せるかくなる。色の衣ぐ數くよ。
のくりて旨づる人影ぱいちなる人よて
あるやらん

惟光　これは都よ光君。過ぎ
ゐ須磨のぼ願はたーよ。旨で給よと

いさ知らぬ人もありける不思議きよ

明石　あら恥かしや光君と。向くより胸うち
騒ぎつ。いそぐ心も上の空の

惟光　月日
とそあれけふとの頃。旨で来んとと

明石　白露の　地上歌　小　玉襷。かけも離れぬ宿
せとか。かけも離れぬ宿せとぱ。思ひなぐ
らもなくくよ。ありさまをよその見

●小語　うちの空のトモ

目も恥かしやさうとて浦浪の帰
らば中空よりぞらんも憂やよりさらば。
難波の潟より舟をあて。被だよ白波の。
入江より舟をさし、よもる。 ロギ上 不思議 オ切ヤ
やなぎ。ありし明石の浦浪の立ちも帰
らぬ面影のそれらあらぬら舟かげの
信まもぢぎり誰やらん 明石上 誰ぞとは。

よそよ調の中の緒の。其音達をぞ
達ひ見んの。頼めを早く住吉の岸よ
生よ草ならん 源氏中 忘草。忘草。生
ふとだよ聞くものならば。其かねとも
あらじかし 地上 げよ
おく。其一言も今ぞ
契の縁あらば 地上 やどその達瀬も程

あらぬの。心ハ互よ。変らぬ影も盃の。
度重なれば惟光も（惟光上 不合）傳内の酌を
そうぐの（地 醉）よりあるて戯れ
の舞。面はゆるぐらもうつりまひ
（明石上 中舞（序・舞ミモ））身をづくし。密なる志るしよ。こてま
でも（地 中 回）廻りあひける。縁ハ楽しき
（明石 中 又）数ならで。難波の事も。かひなきよ。何

思ひ初めけん（ヨリノルモ）

●獨吟

みをづくし。思ひ初めけん。互の心を
（地 中 行下 行 行 ハ）
（地上）夕汐満ち来て。入江の鶴も。聲
惜まぬほど哀なるをうからぬ人目もつ
まぢ。遠ひ見まほしくぶ。思へども。はや
曹ぎ離れて。行く袖の露けさも。昔
（元ハ又 ハ ニ ハ ニ ハ ニ）
より似たる旅衣。田蓑の島も。過ぎゆる
まくよ。名残もうしの。車よめされて

ちゝや。稲舟の

のぼれどくだるや稲舟の。舟景もほの
ぼのと。明石の浦わの舟をゝ思ひの。

別如雲

解題

少年松若母の現世安穏を祈らんとそ師の山伏に従ひて岑入りしたるが、山路にて病となりし為谷行（墨きなから谷間に投げ捨つる法）に行はれしも、一行の行徳によりて蘇生せることを作れり。山伏道に谷行といふ講義なる刑のあるに想を撰へたる創作なるべし。現時各流に行はるゝのは天和貞享元禄等の版本豆にそれ以前の写本に比べて文章少からず相違せり。二百十番謡目録に神竹作とし、録本作者注文に作者不明とす。

本篇は之を、岑入り、谷行、蘇生の三段に分つを得べく、各段の心持緩急等の変化を手かに会得して、全篇の性の重くれぬやう注ひこなすべし。

謡ひ方梗概

前は女なれども若からざれば、聲を派手に扱はず、聊か下めに取りて唯りとあるが宜し。先づ静に何事なく「此方へと申れ」と應へ、**ワキとの問答**に入りては概ね寄事なるべきも、「げに〳〵岑入とやらんはかゝりめに出づべく」「御取りれ」は抑へて出で、「最望む所なれども」と少しかゝり、「御身の父に」以下しめやかに打ち洗みて流ふ。**ロンギ**は氣を取り直しながらも別を惜む心にて、静に弱しつとりとあるべし。緩は詰。**子**　大方は調子高めにさらりと扱へど、「御は去る事にてれへども」云々と、**ロンギ**の「帰るさの」云々は「御取りれ」云々も矢張り静に出で、「唯りと言ひ」「母の御歌の色」より は多少心持を要す。**ワキ**ワキ方の重き習物なれば、尚「御取りれ」云々は唯りと大きかるべし。先づ**名乗**は十分に性を取りて唯りと出で、「以下子との問答に入りて稍緩まりめ、**シテとの問答**はシテを後さぬやうにしてキッパリと言ふべく、「さあらば」云々より は前と少し心持を変へて沈り寄ぬる体なるべし。中入後の**サシ**は徒にさらりと流ふ。調になりて、「暫く」は前へかけて出で、「何と相長を」云々はかゝつて唯りと言ふべく、いかに都若」云々は抑へて最に扱ひ、「御身に」より抑へて静に流ひ、「進退極りて」と心持して流ひ止む。流を揮つて馬蹄を新る恨あるべし。「美達も」云々は抑へて静に流ふ。次の**重ツレ**との**問答**は同情の会を旨とすべく、「さやうの事こそ」云々はかゝつて出づ。**ツレ**との**問答**は前とは変へ、氣を引き立てゝ唯りと弱け流す。**重ツレ**　始くさらりと扱ふが宜し。「今日思ひ立つ」の上歌は初句を唯りと附け、逆しまりさらりとなる。**ツレ**　重ツレよりは軽く、テキパキと流ふ。「かくて面々」のサシは前と氣を更へて沈みに流みなく扱ふべく、「猶も師匠の」以下**ワキとの問答**は、かゝつてさらりとあるべし。**地**　初の「かきくどきたる」云々はしめやかに心中を流ひ表す。「別はさきまでの」云々は内へ取つて静に附け、「見てや止みなん」より変つてさらりとなり、「名残惜しさをいかにせん」と心持し。

迫ーにて頷む。張の「何といひやる」云々は一つとりと承け、「注く涙」云々は一つ流ふ。「久世」は上臈前を飾きらりめに、上臈張はか、つて少ー運び、「背面々に注き居たり」と心持ー、遍ーにて暗りと伴めて止む。「使者の鬼神の」云々は強くきらりと、「法樂鬼神は」云々は確りと注ひ駆ー、遍ーよりかくつて手強く運び込み、壮烈なる風趣を注ひ纏て止メを確りと納む。

辭解

今熊野 京都東山、尾坂以南、泉涌寺附近の地。一に新熊野ともいふ。元禄以前の旅本には「都今熊野」。**椰の木の坊** 旅本には「都今熊野に住まひする山伏」とのみありて「椰の木の坊」なし。又山州名跡志に「又曽祢社(今熊野宮)階に椰坊師阿闍梨といふ人あり。是則日野中納言資朝の息阿新丸を誘引して、佐渡に赴きて本国六郎を討たせし人なり」と見えたれど、太平記の阿新丸の條には師阿闍梨の事を記さず。惟ふにこれは康曲糟風(現に實生、金剛、喜多の三流に用ふ)に新く作れるより採りたるなるべく、故曲も元禄以後糟風より取り入れて新く設めしなるべし。**阿闍梨** 贊誌。執範正行など譯す。我國にては轉じて奥言の秘法を傳ふる職位の稱號。**山伏** 修驗道の行者。**峯入** 山伏の道場と せられたる峯に入りて修行すること。**言語道斷** 言葉意外の事に驚きて發する語。**難行捨身の行體** 身命を捨つる程の困難なる修行。**身に添ふ時たに** 云々 一家に居住する時にても親を見さる間は少しも忘れずに氣遣ふ親心を思ひ察せよとなり。**現世を祈らんと** 現世の息災を祈らんと。**足引の** 山の枕詞。山の音をかりて大和に冠す。又足引を疲れたる足を引きつゝ登る山路に云ひかけ、心は急げども大和の山路を遠く思ふよしに假る。**手向には** 云々 古今集の歌「手向には つゝりの袖も切るべきに紅葉に飽けり神ぬさ」とよりて帛として手向くべきなれど、錦の如き紅葉の切り帛の如く散りかふを見飽きたまへる神は粗末なる神衣などの切り帛は受け給ふまじとなり。こゝには袖を切るといひたれば別れと承けて親子生別の意に轉用せり。**よそにのみ** 云々 新古今集の歌、「そにはかり見てくらすことかと」、我が思ふ人に逢ひ難きを歎ける歌なるを、葛城山さして旅立ちたる我が思ひ子の行く先の氣遣はしきに轉用す。**葛城や** 云々 葛城山は大和國西界の峻嶺、其高峯は南葛城郡に於て高間山となる、即ち金剛山なり。**靖れぬは親の** 雲の晴れぬを親の思ひの晴れぬに掛く。**兜巾** 山伏のかぶるふき冠帽。黒色にして十二の襞積あり。前八分に之を着く。**篠懸** 山伏の着る上衣。麻にて作り前の紐の

紐を屬く。**苔の衣** 樹下石上を住處とする僧の身の上を譬へ、慣はしたる法なれとも、玄には山伏の法衣をいへり。**心力** 孟子に「是心力為之」。**馬はあれども** 玄 拾遺集の人丸の歌に「山科の木幡の里に馬はあれど かちよりぞ来る君を思へば」。**こは誰が為ぞ** 前の歌なる木幡の里の音を聞りて誰の為に物憂く思ふことぞといふを字法に訳く。木幡は山城國宇治郡にありて今は宇治村の大字となれり。宇治は往昔京都より大和に入る要路なりしかば其里の名を掛けて次句を出す。**都出で** 云々 古今集の歌「都出で、今日みかの原泉川河風寒し衣かせ山」。今日三日とふを覆の原に掛く。覆の原は山城國相楽郡、泉川の北岸にあり。泉川は木津川の一名。**河風寒み** 云々 拾遺集に「思ひかねる妹がり伸ばす夜の河風寒み千鳥鳴くなり」。「寒み」は「寒さに」といふに同じ。**ふりさけ見れば** 云々 古今集の仲麻呂の歌「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」より取る。**布留の神杉** 云々 佐布にかけて出す。布留は今天和國山邊郡山邊村の大字。昔より石上は其神木とせられたれば神杉といふ社ありて、万葉集にも石の上振の山なる杉村の」云々とよまれ杉ひ後けて更に遥きがてと音を重ぬ。**遥きがてに** 遥き難くにの意。遥き難く返り見る古今集の歌「我庵は三輪の山本恋しくば とぶらひ来ませ杉立てる門」を胸に置き、杉の縁にて出す。三輪は大和國磯城郡にあり。**よそに見て** 云々 集の「しき」は袖を下に敷きて寝宿することを。**一の室** 行者寺の止宿する為に山腹に造りたる室。数々ある時その最初にあるものを一のむろといふ。**大法** 掟、度く通用の規律。**谷行** 山伏の間に行はれし最上の難行。生きながら谷に陥いれ上より石を落して葬る法。これを谷行と称法に行ひて一行の佛難を除きたるものなり。**遥例** 病氣。**かりそめも** 云々 こゝには暫くの間入峯者の仲間となるも前生よりの因縁なりとの意。**冥見私なきこと** 冥界より神佛の照覧なきこと。正しければとの意。**くれぐれと** 心残りせるさまと淚に目も晴くなるとを兼ぬ。**目もあやなく** 目も明ならず。**せかれぬ道** 淚のせきとめ難き意と、大法の止むを得ざる道なりとを示ひ兼ぬ。**身も** 先達自身も。**兜も** 兜巾もならん、即ち死せんとなり。**悲みの重りて** 云々 楚辭の九歌に「悲莫悲兮生別離」、「樂莫樂兮新相知」。**中々** 却つて。**一切有為の** 云々 金剛般若經に「一切有為法、如夢幻泡影、如露亦

如電、應作如是觀」一切世界の万物は因縁相和合して作為せられたる現象なれば、生滅変化して止まず、譬へば夢幻泡影の脆きが如く、草露電光のはかなきが如しとの意。此法華経物語なるにも引かれたり。

火宅の門　法華経に「三界無安、猶如火宅」とある譬によりて文を成す。三界とは欲界色界無色界と如し」と譬へ、其火宅の門を羊鹿牛の三車に誘はれて迷界の不安なることを火に焼かれつゝある屋宅のき、蓋には行者の道に出でなが為に未だ火宅を出でずと説き、更に親子は三界の絆といふ古諺によりて親子のことに云ひ及ぶ。

耶見の剣　邪心の切るを耶見の剣にて切るに掛く、耶見は因果の理法を否定し、善心好むに足らずとする邪見。**雨土くれを**　石礫を雨下して谷間の藪のほとりの土塊を響き動かす意。王充の論衡に「雨不破塊」とありて、注曲に「しばゝ引用せられたるうゝ明ふ。又雷我物張にも「降る雨滴を動かさず」とあり。以下、動かすといふを心を動かず意に解く。

岡山伎の優婆塞　葛城山を開きたる修験道の元祖役の行者、優婆塞は僧とならずして俗にして仏道を修行する男子の稱。役の行者は名は小角。舒明天皇五年に大和に生れ一人、三十二歳にして家を棄てゝ葛城山に入り、巌窟に籠りて、松葉を食に充つ、孔雀明王咒を誦持して神通を得、仙人なり。**不動明王**　五大明王の中尊たり。その形相は青黒、大金剛の相を火焔中に現ず、盤石座上に住して右手に利剣を持ち左手に羂索を執る。剣は貪瞋痴の三毒を害するを標し、羂索は不降伏者を繫縛するの標徴なり。山伏は此明王を初め五大明王を請ずして祈るを常とせり。「さつく」は素(さく)の訛音。**山神**　葛城山に祭らるゝ事代主神。**護法善神**　仏法を守護する善神。**哀愍納受**　祈願者の心を憐みて聞き入れ給へとの意。**使者の鬼神**　役行者の配下。**伎楽**　伎楽は一種の雅楽の称なれど、こゝに云へるは法華経序品に「香華伎楽、常以供養」、また譬喩品に「諸天伎楽、百千万億、於虚空中、一時俱作」などある数種に伎楽鬼神とあるは伎楽をなす鬼神の意にや。**谷行に**　谷行の行はれし谷間にの意。**善哉善哉**　賞讃の嘆声。**上るや高岡の**　高く上るを高岡にかく。**波せる岩橋に**　役行者鬼神を使役して葛城と大峯との間に岩橋を架したりといふ傳説あるに基く。

五番目ヨリ末

谷行

十月

前シテ　母　ワキ　帥阿闍梨（先達）　重ネテ　小先達　ワキツレ　同行山伏
後シテ　伎楽鬼神
子方　松若

早付

これは今熊野、椰の木の坊よ。帥の阿闍梨と申す山伏にてゐ。さても某弟子を一人持ちてゐぢ。かの者の父堂しくなり。母ばかりよ深くひてゐ。又某いかなる向よ峯入をば行程よ。暇そのためよ唯今出京仕ゐ。いかよ楽内申ゐ

子方　誰よ

て所へ入りゆくぞ。や。師匠の所へ出てゐよ
いうよ松若。何とて久〳〵寺へハより
給ひゐたぬぞ　子方　さんば母御の風の
心ちとても程よ糸らぞゐ　口キ　言語道断。
ゆめ〳〵さやうの事をも存ぜぬ。
まづ〳〵某ゞ糸りたる由所申ゆく
子方　いうよ申ゐ。師匠の所へ出てゐ　シテ　此方
へと申ゆく　子方　此方へ所へ入りゆく　口キ　久〳〵
糸らぞゐ。又松若申されゐハ。風の心ち
の由ゞ承りゐ。いうやうよ居座ゐぞ　シテ　風の
心ちハはや苦しからぞゐ。所心安く思
しめされゐく　口キ　さてハめでたうゐ。又
此き間よ山へ入を仕ゐ程よ。所暇ぞの
為よ糸りてゐ　シテ　げにもよく〳〵山へとや

らんハ。大事の行。とゝで。承りてゆく。

さて松若も。所供。まてゐか　ロキ　幼き者

の供まべき道。まてハ。おくゝ　シテ　さてハ

めでたゝ。やゞて。所帰りゆく　ロキ　さらぬ

やゞて。まゝりまぞるまてゐ　子方　いゝよ申

まべき事のハ　ロキ　何事まてゐぞ

子方　松若も。峯入の所供申。まゝりまぞるまてゐ

ロキ　いやく。唯今も母御よ申ハ如く。此

道ハ難行。捨身の行。體まて。思ひも

よらぬ事まてあるぞ。其上母の風の

心ちを。見捨つべきよあらぬ。ぞたぐ

思ひもよらぬ事。唯。止りゆく　子方　いや

母の風の心ちまていくべ。所行の為よ。糸

ゝりまぞるまてゐ　ロキ　さあらバこのよゝを

母御よ申まうぎるまでいと。よ糸りてい。
松若峯入の供せりぎるより申され
い間。母御の風の所心ちといひ。難行
捨身の道と申しかたぐかるまま
ぐき申してゆくべ。所祈の為よ供も
べき申されい。いらぐゆべき　作承
りい。まづい松若申を如く。峯入の所

供申さん事こそ。最望む所なれども。
所身の父よおくれ日より。唯獨子
のひたまらよ。身よ添よ時だよ見ぬ
ひまい。露程だも忘られぎ。思よ心を
思へかし。唯思ひとまりゆく　作ハ
さる所事こそゆくべども。身ハ難行の
道よ出でく。母の現世を祈らんと。思ひ

、こちたるぞ、あり、あうと　地下歌中　かきくどき
たる其氣色。師匠も母もあるもよ。
あはれ孝行の深きや、戻るらん　打切
シテロンギ上　此上あれぞ力あり。さらば師匠のお供
してぞ、くく、帰り給へや　子方上　帰るさの。
心をあて出づる日も。やがて急ぐや
見るの。大和路遠き思かな　シテ上　思を

つくも手向まで　子方　つゞりの袖もきる
べきよ　地中　別ハさまぐの行く末知
れぞよそよのみ。見てや歩まん葛
城や。高間の山の峯の雲。晴れぬい
親の思子の名殘惜しさをいうよせん
名殘惜しさをいうよせん　中入
ロキサシ上　ツヨク　かくて小童思のほう。峯への姿山
アシライ出

伏の。兜巾篠懸苔の衣　上歌　今日思ひ
立つ道の曇の。今日思ひ立つ道の
曇のたよりぞ。深き志。唯孝行の心
力よ。馬にあれども徒歩より行く。こゝ誰が
為ぞ。宇治の里。都出で。けふ瓶の原
泉川。河風寒み千鳥鳴く。聲とそ
今日の夕べなれ。聲とそ今日の夕べ

なれ。ありさげ見れば春日なる。ありさ
げ見れば春日なる。三笠の山をさし過
ぎて。布留の神杉過ぎがてよ。三輪
の山もとよそよ見て。誰我が庵を定め
けん。峯の巖の苔衣。かたしき初むる
葛城の。露とそ宿りありけれ。露とそ
宿りありけれ　急ぎの程よとれハ

はや一の宮より著きて。暫らくとれば
在らうぎるまでは（重ヅレ（小先達））承りは（子方）いかよ
申まべき事の（ロキ）何事までいぞ
（子方）道より風のこちまでは（ロキ）暫らく。
此道より出でこさやうの事をば申さぬ
事までは。それは習はぬ旅の疲まで
あるべ。よくく休みやく（重ヅレ）松若殿

道より風のこちの由承りは。先達（ツレ）
事ね申さうぎるまでは（ツレ）尤までは
（重ヅレ）松若殿風のこちまで承りはは。何と
思座はぞ所心もとなくは（ロキ）さんば
これは習はぬ旅の疲（ツカレ）てありげまは
（ありげまは。苦しかりまは）
苦しからぎは（重ヅレ）さては所心安くは
（ツレ）いかよ。たべ申は。松若殿旅の疲（ツカレ）

のより作せられいが。以ての外よ見
元給ひては。何ぞて大法の如く谷行よ
行ひ給ひいそぬぞて　げよくとれい
尤ものては。さらぞ出て遂へ其由申すり
ぎるものては。いうよ申は。さるよ松若殿の
所事を尋ね申してゆくぞ。旅の疲と
承りいが。今はやゆつての外よ見え

きせ給ひては。憚り多き申し事よ
てゆくぞも。昔よりの大法ものてゆくぞ。
谷行よ行ひ申さりぎるより皆く申さ
れは　何と松若を谷行よ行されり
ぎるとばや　さんば　大法の事
ものては程よ。是非をぞ申さぞはさり
なぐらかの者の心ぞ中餘りよ不便よ

いへど。大法のよりを懇ろに申し聞かせうぞ。そなたは 重ヅレ 尤 ことは 口キ いうよ
松若。慥に聞け。此道に出でゝかやう
に達例する者をば。谷行とて息ち
命を失ふ事。これ昔よりの大法なり。
中ニ 身に代るものならば。何か命の
惜からん。中ニ 退退極りては 子方 作承

りは。この道に出でゝ命を捨てん事
こそ。最望む所なれども。母の御歎
の色。それこそ深き悲みなれ。また
假初も他生の縁。皆人ごとに御名殘
こそ惜しういへ。地中 何と言ひ遣る
方もなく。皆聲をあげ涙にむせぶ心
ぞあはれなる 重ヅレ 日サシ 不合 かくて面々一同に。

あはれ悲しきせの習。殊更これハ大
法の。冥見和合まさまさよ。谷行よとて
行ひけれ　ロキ　和　先達も師弟の契の中
なれば。何と言ひ遣る方もなく。たゞくれ
くれと目もあやなく　地上　合フ　泣く涙せら
れぬ道なれば。身も諸共よともかくも。
ならでやと思ふ。道ならぬ事ぞ悲

しき。悲みの。至りて悲しきハ。生別
離の心なり。なつく死別ならばかほ
どの歎よもあらじ・・・切有為の
せの習。如夢幻泡影如露亦如電。
應作如是觀の心をも。思ひ知らぞや
さしもとの。行者の道よ出でなゞら。
火宅の門を去りやらで。猶安からぬ三

界の親子恩愛の歎よ等しかり
けり　かくて時刻も移りて
地獄皆面々よ思ひきり。邪見の剣身を
砕く心を刺してかの人を。峰しき谷
よ陥れよ祖よ石尾雨土くれを動
かせる。心を傷めの聲を上げ。皆面々よ
泣き居たり皆面々よ泣き居たり。

重ヅレ行
はや日のたけて急ぎ立ちあらう
ぎるまでは　ロキ愚僧ハ罷り立つまで
くは　重ヅレ先達の所立ちなくはひてん。
われくハ何とは仕はべき。唯急いで所
立ちゆく　ロキまづ楽ごとも慣見ゆべ。
われら都よりかの者の母よハ何
と申まべきぞ。所詮病気も歎も同

ばさべきなり

ど事まていくべき。われらをも谷行よ
行びて給もうゆへ　「所重ヅレ」歎尤まてい。
いうよ方ぐく申ゆ。先達の行せいハ病
氣も歎も同ど事ぎれば。先達をも
谷行よ行び申せと行せい。さて何と
仕ゆべき　「ばよ」「所ツレ」歎尤まてい。
われく存ハ。この年月の行德も

やうの時まてとそゆへ。開山役の優
婆塞。ならびよ大聖不動明王の素
よりけ。松若殿の所命を二度蘇生
させ申さうぞるまてい　「とれも重ヅレ」尤
まてい。いうよ申ゆ。皆ぐ申されハ。この
年月の行德もやうの時まてとそ
ゆへ。開山役の優婆塞。弟よハ大聖不動

明主の素よりけ。松若殿の御命を
蘇生させ申さうずるより皆こ申さ
れい　ワキ　さやうの事こそ向かまほしう
いへ。われらもこれこそ祈念申さうずる
もそい　重ヅレ同上　下　さても師匠の其歎堪過
ぐるありさまを。見聞くも同じ心ぢや
ワキ　下　さりとも年月頼を掛くる。大聖不
動明王の威力　重ヅレ同　又い山神護法
善神　ワキ　下　誅ふ同山伏の優婆塞
愛愍納受垂れ給ひ　地上　使者の鬼
神の伏樂伏女を。書　上　下　甲　助けおもち
ませ　早笛　打上調頭打切　伏樂鬼神い飛び来り。伏樂
鬼神い飛び来りて。行者のお前よ
跪いて。頭を傾け伺を受けて。後行よ

●獨吟仕舞

地拍子　公行よ飛びかけつて。上る位へる　閉ル

地柏子
押し倒し取り掃つて。上なる土をば
掃つて。上なる土をば

飛びかけて。よそ越へるまぎれ盤石。
押し倒し取り掃つて。上なる土をば
やからやからて靜よ返してかの小
童を。悲もなく抱きよげ。行者のお
前よ来らまれで。行者は喜悦の色を
なす。悲悲の手よ髪を撫で。善哉
善哉孝行切なる。心を感ぜるぞとて。

帰らせ給へぞ。ぞ仏樂も共よ。ぢ前を掃
てさかしき道を。分けつ潜りつ登
や高間の雲霧つたなや葛城の。
人の目よとそ掛らざれども真は渡せ
る岩橋を。大峯かけて遥ぐと。大峯
かけて遥ぐと。虚空を渡つて失せよ
けり。

半部

解題 葉部とも書き、亦別名を半部夕顔、夕顔上ともいふ。源氏物語の一節を題色せる一種の能の過去物なり。雲林院に在りし僧主花供養をなしたるに夕顔の花を捧げし女あり、名を問へは五條あたりの夕顔の陰より来れりとて消え失す。僧怪みて五條に至り見るに、草の半部より夕顔の霊現れ、源氏の君の昔を物語るといふ作り様なり。事柄は同じけれども夕顔に比べて詩想や、複雑なり。別に頼曲藤林あれど今は用ひられず。三百十番謡曲録に内藤左衛門作とあり。能本作者註文には同様に記して作者名の下に「後二ハ河内守ト云」と註せり。言継卿記永録三年四月の條に半部夕顔と見ゆ。

謡ひ方梗概 夕顔と姉妹曲。想ひて住静に幽玄なる風姿を謡ひ表すべし。**シテ** 前は優に品好く扱ひ、ほのぐ〜としたる趣なるべし。**出**の「きに取れば」云ふは音を内へ取つて綺麗に謡ひ、**ワキ**「これは夕顔の花にて候」とこしつくりと止む。以下しとやかに承け渡して頭次に少しづゝかり後めて静に、「これは夕顔の花にて候」とこしつくりと止む。以下しとやかに承け渡して頭次に少しづゝかから、後は前よりも美しく華やかなる心なるべし。「寒雑深く顔ぞう」云ふは、聲の釣り上らぬを程と、静に品よく稍高めにとりて謡ひ、「雨原憲が」云ふ亦同じく、**ロンギ**は後やかに趣有るやう承け渡して「訪ふべきか」の一句を確りと扱ふ。**クセ**の上端は静にぶつくりとあるべく、**ワカ**は優に伸びやかなるべし。**地との掛合**は糸りを少なめにして住を締めつゝ謡ひ行き、後の「鐘も頭に」を内へ取る。**ワキ** 髪物なれば通じて物柔らかに品好きやうたと心おくべし。「敬つて由す」**地** 「五條あたりと」云ふくの上以下は表白の辞なれば、前とは更へて稍大きく確りと扱ふを宜しとす。**歌**は更へてあまり高からぬやう善を静に扱ひ、**下歌**より稍遅ひをつけて**上歌**と共に調子の浮きやかになるべく、「草の半部」云ふにて締めて、文句の態をうつし表す。**クセ**は半はを消さらりとしたる味はひなるべく、「草の半部」云ふにて締めて、文句の態をうつし表す。**クセ**は おしなべてだれぬやう引き締めつゝ、静に品好く扱ひ、上端後は少しく晴れやかなるべし。「折りてこそ」は別に出でゝ稍大きやかに扱ふ。終の**シテとの掛合**は程よく乗つて優に承け渡し、「本綿附の鳥の音」と稍心持あるべく、「明けぬ先にと」以下を前よりも僅に鎮めて謡ひ納む。

辞解 **紫野** 今、京都府愛宕郡大宮村の字に東紫竹大門といへる地。**雲林院** 天台宗の名刹。されど今は唯観音堂一宇を存するのみなり。此地は此曲と全く縁故無き處なれども源氏物語の作者紫式部の墓と稱するものゝ紫野に在るより思ひつきてかく作れるなるべし。**一夏** 釋尊の在世にならひ、一夏三旬の間、安居して佛道を修行すること。**花の**

供養 花の焉に修する佛事。云〻 花供養といふも同意。 **敬つて申す** 以下地主の願ひ事を述ぶる表白文の詞。 **非情** 草木土石等情識の無きもの。 **廣林** 假に文字を充つ。或は雙林(娑羅雙樹林の略。釋尊の涅槃せし所)又は叢林(衆僧の結會せる所の總稱)などと撰りたるものか。云〻 泥中より出で、然も泥に染まざる清き蓮の花は、妙法蓮華經として經文の題目にもなりたりとかや。 **一乘妙典** 妙法蓮華經をさす。釋尊成道後説教の方便説なる三乘經を開會して眞實教たる一佛乘教を説示せるものなれば斯くいふ。 **結緣** 佛道に關係を結ぶこと。「此結緣」とは法華經による結緣。 **草木國土** 有情非情成佛廻向文に「一佛成道觀見法界草木國土悉皆成佛」。 **手に取れば** 云〻 後撰集に出でたる壱首(たぐさ)にて續ちべきにより、地に生ひたる草の名もも嗣れず。して遥去現在未來の三世の諸佛に花を捧ぐとなり。 **りよう** 文字考へ難し。但し光悦筆本(最初の版本)には「りよはう」とあり、黒雲齋慕閑の島弟石田少左衛門節附の肉筆本には「りよわう」とあり。これによりて思ふに、光悦本の「は」は「ワ」と讀みて用ひたるかもべく、古くは「リョウオ」を發音せしものなることを知るべし。それを今日の如く流ふに至りしは天和版一本に「ものよそう」とあるより、「そ」を「と」に誤りて傳へたる誤謬なることを爭ひ難く、他の天和本以下の版本には明に誤り「りよとう」とせり。 **白き花の** 云〻 源氏物語夕顔の卷に「白き花ぞおのれひとりちみの扇ひらけたる」云〻。由き花とは夕顔の花をさせるなり。 **たそかれ** 夕暮れ方。以下、前引文たようて夕顔なることを明なるのみか、夕顔の卷の歌に「よりてこそそれかとも見めたそがれにほのぐ見つる夕顔の花」とさへよまれたるに、それを如何なる花と僧の問ひしを思しといへらたり。 **名は人めきて** 云〻 同上卷に「花の名は人めきて、おうるに」。人めきは人間らしきの意。顔といふたつきていへるにや。垣ほは垣。 **夕顔** 夕顔の花と夕顔の上とを此曲には彩と形との如くに扱へり。夕顔の上は源氏物語中の人物。三位中將の娘にして頭の中將と契り、玉鬘の居を生みしも、中將の北の方を怖りて、初め乳母の家に隠れ住み、後五條わたりに方たがへしてありし時、其家の軒に夕顔の花の咲き居たるが縁となりて源氏の居と契り、八月十五日の夜、あたり近き荒れ廢の院に移りたるに、翌日の夜物の氣に籠殺はれて空しくなりぬ。その時に十九歳。 **何がしの院** 同じ卷の詞。 **常はさむらふ** 云〻 何がしの院にも侍りけれど、眞の住家は五條あたりぞと云ふを夕顔にかけて、暗に名告る詞とす。 **五條** 今の京都松原通りに當る。 **空目せしまに** 云〻 夕顔の上の歌「ひかりあるとも見たるは露はたそがれ時のそらめなりけり」に詞を借る。夕顔のありと見たるは露はたそがれ時のそらめなりけり」に詞を借る。夕顔のありと見たるは露はたそがれ時のそらめなりけりとの意。其面影ばかり立ち殘るといふを立花といひかく。 **ありし敎** 花の精(前シテ)が五條あたりと詞をさす。 **座所** 居處の敬稱。 **さながらも** 云〻 宛も昔のまくに寂しく荒れたる宿の、時も亦夕方なりといふを夕顔に掛く。 **瓢** 和漢朗詠集に出でたる橘直幹の句「瓢華屢空」云〻 顔淵、而瓢原憲之瓢に擬すべき草の種を理むるに任せ、原憲といふ文才は、蔡龍(あがご)などの深く顔すを顔淵の飲も屢空しきを顔すべき草の種を理むるに任せ、原憲といふ文才は、蔡龍(あがご)などの深く顔すを顔淵の飲も屢空しきを顔すべき草の種を理むるに任せ、原憲といふ文才は、蔡龍(あがご)などの深く顔以下「物淋の氣色」や」まで、夕顔の卷に何某の院を叙して「荒れたる門のしのぶ草茂りて見上げられたるたとへなくこぐらし。霧も深く露けきに、簾をさへ上げ治へれば、御袖もいたう濡れにけり」とあるに想ひ寄りたるなり。 **夕陽の殘晴** 云〻 新撰朗詠集に出でたる壱首(たぐさ)なる叙景とす。戸飛」を引き、前句を「窓」の誤にて米け、「衆の聲」を特じて、次句の「雨」を換ひ起す。原作は原詩のまゝ「なりしなるべきもの今日は「さんせい」を「しうたん」に撰り傳へたり。 **廬山** 支那江西省九江の南に在る山。白居易こゝに閑居せし時の詩句に「蘭若花時錦帳下、廬山雨夜草庵中」とありて、芭蕉の葉に「廬山の雨の夜草庵の中ぞ思はるゝ」などと作るを轉用せるにや。 **窓東にむかふ** 云〻 新撰朗詠集に出でたる方千の山家の詩句「窓東早月當琴榻」。墻上秋山入酒盃」。「早月」を「ろうげつ」と誤り傳へたるなるべく、「きんのしらべ」を「きんひつ」と誤りたるなり。 **簀戸の竹垣** 簀の如くあみて造れる戸の有る竹垣。風の吾すと承け、竹の縁にて「よ」の義を出す。「よ」は竹の節の古語なり。「よ」は「ら」に寫し誤りたるなり。「ら」を「ろ」に寫し誤りたるは「の」字を脱したるにもか。かば、「絶えし跡」といへり。 **山の端の** 云〻 夕顔の上の歌。末句「かげや絶えなん」。此歌をよろて後何もなく空しくなりし歌。第 **なかく に** 永隔の意を表す時代語。 **半蔀** 草の葉と云ひかく。蔀は古代家屋の戸にて取りつけたるものを釣蔀といひ、その小形なるを半蔀といふ。夕顔の卷に五條の家居を叙して「上は半蔀四五間はかりあげ渡して」云〻。又「門は蔀のやうなるを押しあげたる」云〻。 **源氏の中將** 源氏物語の主人公。源氏、光源氏、又は光君ともいふ。夕顔の上と契りし頃は中將なりき。 **簟枕** 云〻 夕顔の卷に「蚊遣り(刈り)臥と續く。草深き所に假り寢したる意。 **隣を聞けば** 云〻 夕顔の卷に「蚊遣りにけ

らなるべし。鐘の家々あやしき賤の男の聲々」云々。また「明け方も近うなりにけり鶴の聲々もとは聞えで沖嶽精進にやあらん、惟喬さびたる聲にぬかづくぞ聞ゆる（中略）何を貪る身の祈かと聞き給ふ。南無當来の導師とぞ拜むなる」。**三吉野**　三吉野の三は發語にて意味なく、單に吉野といふに同じ。沖嶽は大和吉野山の高峰金峯山の異名。山中に藏王權現を祀り、修行などあるに本づきて精進するをいふ。「沖嶽精進といふ。」云へらは沖嶽精進の行者の器なり。南無は佛に歸を求むる詞。當来の導師とは當に来りて世を導き衆生を濟度すべき佛の謂にて彌勒佛をさす。されば源氏物語に「南無當来の導師」とのみあるをこゝには「彌勒佛」と云ひ添へたり。彌勒佛は佛現に釋尊入滅後五十六億七千萬年にして娑婆に現れ衆生を濟度すべしとせられたる未来出世の佛なり。

惟光　源氏の侍臣。以下夕顔の巻に「（源）『くちをしの花の契や、一房折りて参れ』とのたまへば、この押し扇けなげなるめる花を『』とて取らせたれば、門あけて惟光の朝臣の出で来たるして奉らす」云々とある文に據れり。**つま**　扇の端。**いたう**　いたくの音便。甚の意。**こがら**　春にたてること。**うち渡す**　云々　同じ巻に古今集の花顔歌「うちわたす遠方人に物申すわれそのそこたぐら給ふを、御隨身つい居て『かの白く咲けるをかざむ夕顔と申し侍る』」と白く咲けるは何の花ぞと」を引きて源氏が「そちかた人に物申すとひとりあるに據る。こは花を折らせ給ふ前の事なるを、茲には後の事として出せり。**逢ひに扇**　逢ひ逢ふと云ひかく。原作に源氏惟光に紙燭をして扇を見給ふに、「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる花の夕顔」と書きてありしが契の縁となりし由作れるをさす。**をりく**　花を折る意に掛けて、「子海士の此宿　原作に、夕顔の上が名告り給へといはれて「海士の子なれば」と答へし由作れるを引き、「子の」といふ言を借りて此宿と云ひつゞく。海士の子とは和漢朗詠集に「白波のよする岸に世をつくす海士の子なれば宿も定めず」とある歌の心はえなり。更に其原歌の詞を借り、宿の事を推とし知らぬといふを白波に云ひかけ、波の縁にて次句につゞく。寄るべの末とは則れ親みそる行末の意。**折りてこそ云々**　扇の歌に對する源氏の返歌。第一句「ほのぐ見つる」。第四句「ほのぐ見つる」。**終の宿り**　結句身の落ちつくべき真の住家といふ程の意。偖に立條の宿を告げ知らせたるに寄せて、今は世に疎方も無き身の上を明したる意を述ぶ。**木綿附の鳥**　言ふの言を承く。鶏の異名。**東雲**　夜明け方。**あさま**　明ら様。朝の意を含ませしむ。

三番目　　九月

半都

シテ　女（夕顔ノ精）
ワキ　僧

早笛

これい都紫野雲林院よりまひまする僧にて候。さてもわれ一夏の間花を立てゝ候。はや安居も過ぎ方よりゆくべし。色よき花を集め、花の供養を執り行ばやと存じ候。敬つて白毫立花供養の事。右非情草木たりといへども。此

さてはも
ゆくべしも
供養の事も

花廣林より開けたり。豈心なしといそんやなんづく泥を出でし蓮。一乗妙典の題目たり。此結縁より引かれ草木国土悉皆成仏道

手より取れぞたぶさより穢るとなぐら。三世の仏より花摩る

不思議やな今までハ草花りよりそうして見そうる中より白き花の已ひとり笑の眉を開けたるハいらなる花をとてけるぞ

愚のお僧の作やな。たそれ時のをりなるよなどかハそれとぼ賢ぜざる。さりなぐら右人めきて貌しき垣ほよりたれで。知らめきぬハ理なり。とれハよ顔の花をそれよ顔の。花のをハいらなぐよくさぞとタ顔の。花のをハいらな

●小話

ロキカル上

シテ

名のらぞと絶えん知らしめ
さるべし。われ此花の蔭より来りたり
さて此せよときんの花の供養よ
逢さんためか。それよつけても名のり
給へ

シテ

名はありなづらこき跡よ。なり
昔の物語

ロキカル上

シテ

何某の院よも
常はさむらふ眞よ

地上歌

五條あたり
とも顔の。五條あたりとも顔の。空
目せしまよ夢とあり。面影ぞなり。
き跡の立花の蔭よ隠れけり立花
の蔭よ隠れけり。

中入

返シ

立花の

ロキカル上

あり。教よ従ひて五條あたりよ来
て見れば。げにも昔の屋所。さなづら
やどりもと顔の。瓢簞屋こ空。草

顔洗ひ苔よ濡し　後シテ上　一声　藤蘿漂く鎖
せりゝ陽のざんせい新よ。窓を穿
つてゐる　地上　影　月　幽　うたんの泉の聲
雨原憲が。樞を濕も　地下歌中　打切（チヤンチヤン）　さらでも袖
を濕せ廬山の雪の曙　打切中ヨリ　窓東よ
むかふ月。窓東よむかふ月。
琴掛よあたり。　知　月　天　上の秋の山。物

地柏子　ちかこ　あたり　ニセ

素人の氣色や　中　ロンギ上　げよ物凄き風の音。
簀戸の竹垣ありし世の夢の姿を
見せ給へ。菩提をとゝくとむらちん　シテ上
山の端の心も知らで行く月。上の空
人　甲　て絶えし跡の。よいとか達よべき
地上　山賊の。垣ほ荒るともをりくハ
シテ中　哀をかけよ撫子の　地上　花の姿をまみ

地　ここにて夕顔の

●獨吟仕舞

えなむ　シテ　踏訪ねべきか　地　なりくよ

シテ　すらばと思ひ夕顔の　地　草の半蔀

おしあげて立ち出づる門姿見るよ

源の留まらぬ。打切　其頃源氏の中將

と問へ。此夕顔の草枕。たゞ假臥の

夜もすがら。籬を問けば三吉野や。古

嶽精進のち聲まで。南無。當來道師。

彌勒佛とぞ唱へける。今も尊きお

供養より其時の思ひ出でられてそぞろ

よ濡るゝ袖かな。猶それよりも忘れぬ。

源氏との宿を。見初め給ひしつ方。

惟光を招きよせ。あの花折れと宣へば。

白き扇のつまいたゝ。ずとばかりよ

此花を折りて来らまる　シテ上ノ二　源氏つく

づくと思ひ賢してうち渡せば遠方
人よ問ふとても。それ其花と答へぎん。
紅よ知らでもあるべきよ。奪ひよ扇を
手よ觸るる。契の嬉しさ。ちらく
尋ねよるなら。定めぬ海士の此宿の。
主を誰と白浪の。寄る島の末を頼ま
んと。一首を詠じおとしまま。折り

地拍子
鐘も
又地拍子板
鐘も

てとそ。それかとも
見めたそれよ。ほのぐ見えて。
花のよ顔。花のよ顔。花のよ顔
紅の宿りは去らせ申しつ　常よは
ともらひ　おちまとと　末綿海
の島の音　鐘も頻よ　告げ渡る
東雲。あさまよもなりぬべし。明けぬ

先よとも顔の宿り。明けぬ先よとも
顔の宿りの。また半都の内よのりて
其まく夢よとぞ。なりよける。

禪師曾我

解題 曾我仇討物の一なり。鬼王團三郎の形見を持ちて曾我に帰るを前段とし、伊豆祐宗が曾我の京第九上の禪師の討手に向ふを後段とせり。別名を**久上**(久我美)といふ。今本を元文寫本及元禄版本に比べ、更に寶生流謡本に比ぶるに行文甚しき相違あり。其主要なるものは辭解中に▲印を附して之を挙げたるが、夫體に於て古本及寶生本は行文冗長の嫌あり。今本は之を約むるに當りて作意を思はざりし缺点あり。古本には後段に團三郎が母よりの文を禪師のもとに届くる一節ありて前段と照應すれども、今本は其事に後篇無く之を省きし為、前後二段の連絡無し。能本作者注文に久我美の曲名を寄せて敵に向ふ形などありて、其曲を假に斯く呼びたるなどには誤るか。

語句梗概 夜討曾我の後日譚といふべきものにして、曾我兄弟の形見に對する母の慰歎と、九上の禪師の勇壯とを作れる現在物なれば、能くして而も少壯の意氣を旨とし、童くれぬそれの味はひを誰ふべし。**禪師** 法體なれども武門の出なれば雄々しくして而も少壯の意氣を旨とし、童くれぬやうに扱ふ。見づワキの宗門に依り「祐宗は何の為に御出にてはぞ」と何事なく應ト、緑金よりの討手と聞きて「やと思ひかけざる氣色にいひ、「祐宗は某が討手の為な」と高からぬやう振と結氣を更へ、次句を決然と、「抑これは」より調子を張つて丈夫に凛々しく謡ふ。「たとへば沙門の禮として」は引き締めて手固くあるべし。**母** ほぼ常のツレの位と同トなれど、氣無しに軽く扱ふは宜しからず。其趣は**鵜崎**の半段などに類して静に謡ひかゝるべし。「祐經を討つ能ならば」云々は形見を受け取りて言ふ處なれば一息たきてかゝりめに少し強りと出で、「敵を討つは」より改めてさらりめに、「子どもの形見怨めしやと心にてしめやかに詠ひ止む。次の詞「箱根へと聞けば」云々は氣を新たにして出で、いかなる用をも」は撥けぬやう取つて直ぐやかなるべきも、鬼王の方斬か軽し。二人共主の形見を古里へ持ち帰るものなれてあいりめに扱すが宜し。**團三郎鬼王** 住凡そ同トくさらりとして直ぐやかなるべきも、鬼王の方斬か軽し。二人共主の形見を古里へ持ち帰るものなれは 夜討曾我に於けるが如き勇壯の趣はなく、謂はゞ帰りわびたる風情なるべし。「けにく」以下母との掛合は吸次に詰めて運び流す。**ワキ** 強く底文高にさ一聲は健やかに「箱根」以下母との掛合は吸次に詰めて運び流す。**ワキ** 強く底文高にさらりとあるべし。**主衆** 勢ひて謡ふ。「筆の主でどころ」云々はきらりと取り、「丸上の寺に遠りけり」の遠しにて鎖む。**地** 「里原の下に忍辱の鎧」は シテの氣を承けてかつしりと附け、「悪魔降伏の」より兼つて手堅く謡ひ続け、「心得後へ」以下は乗らずに前よりはさらりと勢有るべく、キリは手強く烈しきやうに謡ひ納むべし。

辭解

散りにし花の 云 曽我兄弟の死を散りし花に、鬼王團三郎の帰郷を残り香を送る歳に喩ふ。**櫻川**にまかれたる古今集の歌「櫻花散りにし風の名残には水なき空に波ぞ立ちける」に思ひ寄りたる作文なるべしか。**曽我兄弟** 河津三郎祐泰の子、伊藤祐親の孫。兄は一万と云ひ、弟は箱王と云ひしが、兄五歳弟三歳の時、父祖父工藤左衛門祐經の為に父を殺害せられしかば、母の曽我祐信に再嫁せるに従ひて曽我姓を冒せり。後兄は十郎祐成と名のり、弟は五郎時致と稱し、共に心を一にして復讐を志し一年を経る間に、富士の巻狩の時に遂ひ絶に素懐を果せるなり。時に祐成廿二歳、時致廿歳。此事**夜討曽我**に作らる。**鬼王、團三郎** 共に曽我兄弟の郎党。流布本曽我物語には通三郎、鬼王丸とあり。大石本には通三郎と丹三郎に作る。**過ぎにし二十八日** 建久四年五月二十八日。**井手の館** 建久四年五月八日より頼朝駿河の蒲澤の原(駿東郡富士山東麓)にて狩をなし、十五日轉じて富士野(富士郡、神野、井出、富士山西麓)の狩場に移り、十六日引き続き狩をなしたること吾妻鏡其他に見え、此狩倉には頼朝麾下の將卒多數の假屋形を主て並べたる事曽我物語にも見え、又同書に「彼寺(鬼王、通三郎)は富士の裾野井出の館より、次第の形見を取持ち曽我の里へぞ急ぎける」とあり。**其身も郎座に** 云 十郎は其場にて討たれ、五郎は生捕られて四十二日に見えたるとこゝには略く作る。**使の涙きて帰りしは** 云 鬼王、團三郎の故郷への使として曽我兄弟を見捨て、帰るを花をみすて鳥き帰る雁に譬ふ。かりがねは雁の古語。漢の蘇武が雁の足に書を結ひつけて古郷に寄信せりといふ故事に基き雁を音信の使といひなしたる例まきより「使」といふにや。**それは越路に** 云 其は越路(北陸道)に帰る雁その意にて越前の地名帰山(かへるやま)にかけていふ。熊野の「花を見捨つるかりがねの、それは越路我ぞまた、東に帰る名残かな」の影響を受けたる文にや。**富士の嶺の** 云 富士の麓にて煙をいひ、煙見えたる家といひかく。四方葺きたるしの家を東屋といふ詞あるにより、それを借りて東の方の故郷の家の意に取りなせり。**曽我の里に** 云 曽我物語には鬼王通三郎通にて、曽我兄弟の討死の事形見の品を携へて其まゝ高野山に入り出家したりと見ゆ。**人までもあるまじ** 取次にも及ばず。**祐經** 工藤左衛門尉。曽て赤澤山の狩倉にて兄弟の父を射殺したる人。▲元禄版注本には今本の「母をば思はぬ子供の形見」の後に次の文ありて「恨めしや」の句無し。「とはいはぬなつかしや、まだ移香の残るぞや、上故さればこそかくるべしとは白波の、くゝあやしや誰に其織、注くゝ見れば色々の、形見ありかも其まゝなる、髪の髪、眼の守、手なれや主ならで、誰を守りの形見ぞや」と、胸にあて顔にあて、聲を惜まず泣き居たり、くゝ」。**祐經根** 箱根権現社の僧坊。もと五郎の上り居たる寺。**久上の寺** 兄弟の末弟を伯父伊東九郎養ひて子とし、越後の國九上の山寺に登せたるが、伊東祐師と云ひたり。事曽我物語に見ゆ。同書に源師の年を十九とせり。**捨人なりとも** 云 出家なりとも兄弟の骨肉のなれば討手を向けられいかなる長き月を見んとしはかられずの意を水莖にかく。元禄本には「目をかく水莖の」。**水莖** 筆跡。ここには手紙。**筆の玉てどころ** 何と書かんにも筆のつけ處もなしとなり。▲寶生本は此前段を省き、シテの出を初とせり。**別行の子細** 特別に修法などを行ふ子細。**百座の護摩** 百座は百日修法の座に着く者なるべし。護摩は密教に於て通場に本尊(大日如来)を安置し護摩壇を設け、火を焼きてそれに物を投じて修する祕法の一。**藤波の** 云 **藤波の** 云 **伊藤の九郎祐宗** 護摩を修せるものか。**藤波** 紫をゆかりの色とし、藤の花をゆかりの色とし、藤の花を呼べる古語。**伊藤の九郎祐宗** 今本の「ワキの名出詞の後に、元禄本には次の文あり「シテ祐宗の御登山とあるに何として門を開いて入申しはぬぞ」。曽我の御方より御文を持ちて参りてはんぬ。**あら心もとなや** 此夜中にいかなる文にてあるやらん。**まづく拔いて見はやと思ひ** 兄弟の骨肉出の館に忍び入り、思ふ敵を討ち其身も郎座に討たれば、いつがいつまでと待ちひつるに、さては祐宗はわれらか討手の為に登山と覺えたり、まづ詞をかけて見ばやと存じ、まづ拔見の箱を開めて隙はりはへワキはや推量してはよシテさればこそ討手にてはぞや、心静に文を見ばやと存じ、其身も其まゝ、討たれ給ひて、又弟は其為の出家、忍びたりとも難あるまじ、いかに也其身を全うして、兄たちの跡をもとひ、残り留る母が身をも、とひ慰めてたび給へ、あら有がたや、今はの時に此御文を給はりたる、母の御方のありがたさはいかに、さても祐宗は果が正しき養父にてはまゝまきすや、情なくも方便給ふもの哉なと」とありて、今本の「よく〳〵異常に討死」云々に続く。寶生本も大同少異の相違あり。**鎌倉殿** 源頼朝を指す。**墨染の衣** 僧の衣、元禄本に「景綱の下に」。**忍辱の鎧** 忍辱とは諸の侵辱怪害を忍びて恚り

恨む事なき意。これを外難を防ぐ鎧に譬ふ。法華經勧持品に「我等敬信佛、當著忍辱鎧」故には墨染の衣の下なる肉身は忍辱の鎧にてかためたりとの意。**悪魔降伏の劒** 悪魔を降伏する利劒。不動明王などの持てるものによそへ云ふ。**三尺の長刀** 刀身のたけ三尺なる長刀。▲今本「心得鉄へ祐宗と」の處、元祿本には「心得鉄へ祐宗よ、く、養父は親といふ名あり、振刀は危しや、五逆の罪は恐ろしや、よしやかくる浮世にながらへて、何の要碍は城廓は、身を揚むにこそよるべけれとて」の文ありて「木戸」を開いてと續く、寶生本大同少異。**木戸** 出入口の門。**梓弓** 梓の木にて作れる弓。ひくに冠する枕詞、こゝには上の射取れを受けて出し、梓弓の引きと云ひかけて次句に續く。**足田の小三郎** 郎等の名。脇作の人次の騎野の源六に同じ。**法師の切るとて云** 僧侶の斬ることゝして其斬り方は袈裟がけなりとなり。袈裟がけは袈裟をかけたる様に一方の肩先より斜に他の一方の脇の下へかけて斬り下ぐること。**南無佛** 南無阿彌陀佛の意なれど轉じて茲には事となして歎息するに用ふ。元祿本に「南無三寶」とある方宜し。**無慙やな** いたはしや。**沙門の體とて云と** 僧侶の身なりとて何事をも咎むる事無く見ひ許すといふは物事に寄るぞとなり。**打物** 打ちきたへたる武器。即ち太刀、長刀の類。**御本尊** 壇上に安置せる佛像。**あびらうんけん** 大日如来に祈る咒文の詞。阿毘羅吽欠。大日經疏に「此五字即是降伏四魔眞言句也」、うんけんを劒に云ひかく。つなぬかれは貫かれの訛音。**禮盤** 本尊の正面にある佛を禮拜する高座。**利劒** するどきつるぎ。不動明王などの持てる利劒によそへていふ。

四番目
畧二番

禪師曽我（ゼンジソガ）

七月

ツレ　曽我兄弟ノ母
ツレ　鬼王
シテ　團三郎
ワキ　九上禪師
ワキヅレ　伊東祐宗
立衆

次第上　團三郎　鬼王
散りても花の名残りは。散りても花の名残りは香だに残りて送る嵐かな

團三郎詞
これは曽我兄弟の人々に仕へ申す、鬼王團三郎にて候。さても兄弟の人々は。過ぎし二十八日の夜。井手の館へ忍び入り。易々と敵を討ち。其身も即座よ

恨む事なき意。これを外難を防ぐ鎧に譬ふ。法華經勧持品に「我等敬神佛、當著忍辱鎧」故には墨染の衣の下なる肉身は忍辱の鎧にてかためたりとの意。**悪魔降伏の剱** 悪魔を降伏する剱。不動明王などの持てるものによそへ云ふ。**三尺の長刀** 刀身のたけ三尺なる長刀。▲今本「心得給へ祐宗と」の處、元禄本には「心得給へ祐宗よ、く、養父の親といふ名あり、誇刀の危しや、五逆の罪の恐ろしや、よしやかゝる浮世にながらへて、何の要得の城廓の、身を慎むにこそよるべけれとて」の文ありて「木戸」を開いてに續く。寶生本大同少異。**木戸** 出入口の門。**梓弓** 梓の木にて作れる弓。ひくに冠する枕詞。こゝには上の射取れを受けて出し、梓弓の引きと言ひかけて次句に續く。**足田の小三郎** 郎等の名。鍛作の人次の狩野の源六も同じ。**法師の切るとて** 云々 僧侶の斬ることとして其斬り方の袈裟がけなりとなり。袈裟がけは袈裟をかけたる様に一方の肩先より斜に他の一方の腋の下へかけて斬り下ぐること。**南無佛** 南無阿彌陀佛の意なれど轉じて茲には事をなして歎息するに用ふ。元禄本に「南無三寶」とある方宜し。**無慙やな** いたはしや。**沙門の體とて** 云々 僧侶の身なりとて何事をも咎むる事無く、思ひ許すといふの物事に寄るぞとなり。**打物** 打わきたへたる武器。即ち太刀、長刀の類。**御本尊** 壇上に安置せる佛像。**あびらうんけん** 大日如來に祈る咒文の詞。阿毘羅吽欠。大日經疏に「此五字即是降伏四魔眞言句也」。うんけんを剱に言ひかく。つなぬかれは貫かれの訛音。**禮盤** 本尊の正面にある佛を禮拝する高座。**利剱** するどきつるぎ。不動明王などのもてる利剱によそへていふ。

四番目
畧二番

禪師曽我（ぜんじそが）

七月

ツレ　曽我兄弟ノ母
ツレ　鬼王
シテ　團三郎
ワキ　九上禪師
ワキヅレ　伊東祐宗
立衆

（團三郎・鬼王　次第上）
散りよし花の名残よハ。散りよし花の名残よハ香をかり送る嵐かな。

（團三郎詞）
とれハ曽我兄弟の人々よ仕へ申も、鬼王團三郎ではさても兄弟の人々ハ。過し二十八日の夜。井手の館へ忍びのり易くて敵を討ち。其身も即座よ

ばへ中もと。

討たれ給ひてい。われら兄弟も所供申
いくども。形見の品ぐを持ちて。お里へ下
れとの所事までいは程よ。かひなき命助
かり。所形見を持ち唯今お里へ下りい
ふ。使の泣きて帰りしは。使の泣きて帰
りしは。花を見まつるかりがねそれい越
路より帰る山これい名高き富士の嶺の。

●小話

園三郎
鬼王道行上

煙見えたる東屋より帰りかねたる心
かな帰りかねたる心かな。

園三郎

急ぎい
程よ。これいはや曽我の里よ着きてい。
まづく案内を申すぎるまでいい。
よ案内申い。鬼王園三郎ど来りたる
由それく所申いへ

母

何鬼王園三
郎と申まか。人までもあるまで此方へ

来り候へ。さて唯今ハ何の為に来りたるぞ 圓三郎「さんバ面目もなき御使に来りてハ 母「面目もなき使とハ。いかなる事にておるやらん 圓三郎「過ぎし二十八日の夜。井手の館へ忍びいり。易々と敵を討ち。御身も即座に討たれ給ひてハ。又御形見の物を持ちて来りてハこれ〳〵

御覧候へ 母「祐經を討つ程ならバ。何とて落ち延びざりけるぞ。敵を討つハ父がため。母をバ思はぬ子どもの形見。怨めしや 鬼王「げに〳〵御歎きまでハ。まづ箱根へ人を御上せ候へ 母「箱根へと聞けバ思ひ出したり。まづ〳〵九上の寺へ来り候へ 圓三郎「げに〳〵禪師の御事

よのう。假令身ハ捨人なりとも
母方ん上 いらるる日ども 圍二郎 水茎の 地上 筆の
立てども覺えねど。戻なごらるよかき
くれて九上の寺よ。送りけり九上の寺
九上禪師伺 九上禪師伺 送りけり 九上禪師伺 これハ九上の禪師
もてい。われ此間別行の子細のい間。
百座の護摩を焚かどやと存い

立東一セイ上ツヨク 藤波の懸れる木ごの梢をば。嵐や
寄せて。散まらん 紙宗伺 これハ伊東の
九郎祐宗なり。さても過ぎるこ二十
八日の夜。曾我兄弟の者。井手の館よ
忍びのり。親の敵を討ち其身も即座
よ討たれてい。其弟よ九上の禪師と
申していを。幼少の時より其養子と

して出家させ申いたをいうる者の申
やらん。君聞しめし及ぼせ給ひ。急ぎ
搦め捕りて糸らせよとの御事にて
いる程よ。唯今九郎の者へ押し寄せい。」
これはや九郎の者ども参てい。まづ〳〵楽
内を請ぜもぎるまてい。いらよ楽内申い。
伊東の九郎祐宗ぐ糸りたり。急いで

九上の者ども

門を開きいへ　九上　祐宗ハ何の為よ御出
そいぞ　祐宗　鎌倉殿より搦め捕りて
糸れとの御事なり。疾う疾う出でいへ
九上　や。祐宗い某ぐ。対手のためぞ。よ〳〵寄
常よ討死し。御名を揚げて糸らせん。
九上　抑これい河津の三郎ぐ京のよ。九郎の
禪師　地上　禪師　墨染の下よ。忍辱の鎧。悪魔
太鼓頭　太鼓頭（再ビ）

心得絵へハ太鼓打込ノ終リノ頭ニ當テヽ出ル

地拍子
足田の小三郎ガ

隠伏の剱。三尺の長刀。旨し。駿羽。したり。討つべきやうとそ。なりけれ。心得絵へ袖宗と。木ゞを間いそ。切つて出づれぞ手もとよりとづきあやまちまち。射とれや射とれ。梓弓。足田の小三郎ゞ進んで。かるを長刀取り延べ。師の切るとて。袈裟がけなり。南無佛無慙やな

地拍子
ゆるもの事よとそ
まれ。一命の

●獨吟

●縱へや。沙門の體とて。思ひゆるまも事よとそよれ。唯一命の勝負をせんと。狩野の源六。其外若武者われも。われもと懸りけれども。禪師ハ騎がぎ打物。金せ。とやかーとよ切りたてられ門前の外まで。ろき退けば。とれまでなりと。長刀投げ捨て。護摩の壇上よ

走り去り給ふ本尊に向ひて阿鼻羅吽。
欠よつぶぬれ禮盤の上より落ち
けるを生捕よせんとて利剣を奪ひ。
鎌倉へとそ上せけれ鎌倉へとそ
上せけれ。

車僧

解題 大天狗が佛法を妨げんとして車僧との禪の問答、及びその屈伏を作れる曲なり。深山和尚の古傳に據れりと思はる。永正十一年南都興福寺の能の時上演せられしこと中興談儀の後人の加筆に見ゆ。能本作者詳文、及び二百十番謡曲錄に世阿彌の作とあり。

謡い方梗概 隨處に素合呼吸の易からざるものあり忽ちすべからず。**シテ** 前後を通じて豪慢の心を根強く持つべきし。前は問答を以つて車僧を屈伏せんとする氣込を看るべし。**出**の「いかに車僧」は聲を廣く大きく言ひ懸け、以下**ワキ**との問答は地みなく確りと頭次に詰めて向い進み終の「車僧の」をかつて強く謡ひ地に渡す。後は天狗の本性を現して行數べを試むるものなれば前よりもどつしりと大きく聲調又強く遲しきを要すれど あまり烈しくなるを好まず。「愛宕山樒が原に」の**出**はさらりと大きく、詞に移りて「さて車輪はいかに車僧」、「引く」か移ちか車僧」此二所をかつて確りと言ひ、「魔道にも」より一聲の調子にてかつしりと、**地**との掛合亦同じく、「佛あれば」云々の一句は素つて謡ふ。**ワキ**との問答は前シテのよりも更に居丈高に氣合を重んじて同じ對へ、**ロンギ**は強々と漸次に位をすめ謡ふべし。**ワキ** 重くなるまでやうにして、どこともなく異常の氣骨の位の見ゆる姿なるが宜し。次幕はあまり位を取らずに強くさらりと出で、**上歌**も亦すらすらと爽やかに謡ひ、次の**詞**より稍確りとなる。**シテとの問答**は位ほぐしシテと同じ心にて落着好く應へ、「空洞風流し」の一句を心して確りと謡ひ、以下順次に火づく詰めゆく。**後シテとの問答**は氣を乘せて地みなくは振へど、天狗を揶揄する程の心を本とすべく、問答進みて「かるかるの車」云々の一節は、遂に強ひられて通力を出す處、詞の出を前へかけて氣合好く言ひ、「彌子を上げて虚空を打てば」と確り謡ひて地に**地****歌**の「三界無安」云々はさらりと附け、「おうしの二字を別に出で特に確りと扱ふ。次の**上歌**は渡す。さらりと出で、「心空なる」より稍確りと謡ひ、「車路はかけれども」の出を少し前へかけ、「卯入りあれや」を確りと、「呼ば、うて」よりさらりと運び、止メの返しにて鎮む。**後のシテとの掛合**はどつしりとあらべく、「祈らば祈るべし」以下乘つて少し遲ひを附け、地みなく謡ひゆき、終りの「いざ車僧行數べせん」を稍氣をかけて確りと止むべし。「不思議やな」云々は以下聊かつ、強みに進み、「止むれば進む」を確りと承く。**キリ**は「山河を」より次第に強みに進み、「あら貴や」より又元の位に戻し、「大天狗は」以下確りと大きく。「山河を」より次第つて遲ひ、「驕かばこそ」云々を確りと大きく、「あら貴や」より又元の位に戻し、「大天狗は」以下確りと謡ひ納む。

辭解 **後の世**云々 後の世までも往來する歳見の上に立ちて見れば、さてし世上萬物の迷夢の醒めんとしもせざるこそ哀なるべし。車の床といふ縁により、常寢

と云ひつぐ。常寝は永久に眠る謂。**車僧** 往昔、山城葛野郡太秦の南市河に在りし海生寺の深山和尚を指すなるべし。遠碧軒記(黒川道祐)山州名跡志等に引用せられたる深山行状記、及び和漢三才圖會等に見えたる傳によりて深山につきての口碑を作れるものなることと推せらる。太秦の地は嵯峨に接したれば地理も此曲と一致せり。唯記録乏しくして古曲に據る處を見出でざるが遺憾なり。遠碧軒記の引文に「車僧諱正虎、字深山、結庵于山陰之山中、海往来光蔵之路、自持時菜供本佛、常乗破車、往四衢通、通俗小堅随其所欲推之、里人名之曰破車、或謂以七百歳之事、而自歴誌云国兹又呼七百歳」云々。和漢三才圖會に「海生寺在太秦南市川村、開基未詳、車僧深山和尚正虎住之焉、車僧常不著生國姓氏、常乗破車、往返于四方、能歴試七百年来往事、以語之、呼稱車僧、又名七百歳、謁南禅寺通翁、猊大悟、號深山正虎、住于山科草庵、後遷于當寺、遷化、有車僧塚、今爲萬蘂派」又山州名跡志に「深山影堂在同所(太秦南市川村)西向二」。**空は小倉** 空は小暗きを小倉山に掛く。小倉山は山城國葛野郡嵯峨村の西にあり。**嵯峨野の嵐山** 嵯峨野に雲を散らす嵐と云ひかけて嵐山を出す。嵐山は大井川を隔てたる嵯峨の對岸。葛野郡松尾村に属す。**大井川** 雲の多きを大井に掛く。嵐山の北麓を流るゝ川にて下流は即ち桂河なり。**西山本** 日の廻りて西に入るを西山に掛く。嵯峨嵐山一帯の山地は京都の西に當りたれば總じて西山といふ。本は麓なり。**浮世をば何とか**云て 天狗の車僧を嘲りていへる一首の歌。以下天狗と車僧との問答なり。意は車僧よ何と思ひて世の中を廻り歩るくぞ、汝自身まだ生死輪廻の迷界の内にありて出離解脱せざるにあらずやとなり。曾我物語の歌にも「今日出でゝ廻りあはずは小車のこの輪の内になしと知れ君」の類語あれば此歌に近き原歌のあるなるべし。未だ見出でず。原歌は法華経の三車の喩などに寄せて詠めるものか。**浮世をば廻らぬものを**と云て 車僧の答へたる歌なり。此方歌として姿を得たり。意は車僧の車に乗ると見ゆるは虚妄の假象なり、人身は四大五蘊假に和合のもの、何の處にか我なる實躰あらん、既に我なくば車に乗り得べきやうなし、乗り得べき主躰なくば浮世を廻らざるものをとなり。**我があらばこそといふは誰そ** 汝車僧、我なくしといへど、然らばその如く物云ふ汝は我ならずして抑誰なるかとなり。**空洞風涼し** 空虚なる洞の内に遮ぎる一物なくして涼風の吹き来るにまかすと、我の實躰なきを譬へ、無我の妙理が解らぬかと更に天狗の反問を爲破す。**我名のみ高雄**と云て 拾遺集の歌「なき名のみ高雄の山といひ立つる人は愛宕の嶺にやあるらん」に辭を借る。我名の高きを高雄山に掛け、天狗は車僧が機鋒の鋭きに當りかね、我は名高き天狗なるを知らざるかと、云はせも果てず車僧は斯る慢心の高き者は佛道の仇なるぞと、仇を愛宕に掛け、さては愛宕山に住む天狗なるよなといへるなり。**一**

所不住 我がすみかを云はれたる返しに御僧の住家は何處ぞと天狗の問へる答なり。車の往くに任せて身も心も一所に定住せずとなり。**車は如何に** 一所不住は聞えたり。されどその乗れる車はやはり一の住家にあらずやと反問す。**火宅の出車**と云て これは火宅の如き迷界を出づる車にて、世の常の車に異なり。されば廻れど廻らず、押せども押されず、引くともひかれずとなり。火宅の出車は法華経に出でたる喩、次項参照。**三界無安**と云て 法華経譬喩品に出づる語。欲、色、無色の三界は衆生の生死輪廻する迷界にして、其無常轉變の劇甚なる須臾も安住する能はざること猶大に燃えつゝある家に止住するが如しとなり。同じ品に昔或長者の邸宅火災に罹りしに三人の小児遊戯に興じて家を出でざれば、父の長者は門外に羊鹿牛の三車ありて汝等を待てりとすかして之を救ひ出したりとの譬喩譚あり。所謂小児は衆生、長者は佛、火宅は現世界、羊車は聲聞乗鹿車は縁覺乗(以上二乗は小乗教)、牛車は菩薩乗(大乗教)に喩へたるものにて、此三車優劣あれども共に三界の火宅に彷徨せる衆生を涅槃の楽都に導かんが爲の法なりと見ゆ。以下此喩を借りて今此車僧の車も火宅を出づる羊鹿牛の三車に同じく、其廻るも涅槃の直道に導く爲なりとの意を寓る。**心空なる**云て 見聞の人も驚きて心も空になるを空なる雲に掛け雲水を續く。**深立つ空** 訝しき調なり。何讀かの誤なるべし。**とよむ** 聲又は音の響きを轢くこと。**車路** 車の行くべき道。**愛宕山太郎坊** 愛宕山は山城國葛野郡の北隅にあり。中世修験道の盛なりし頃七島山の一に數へ山伏修行の道場とせり。俗に天狗の住する山と傳へ、源平盛衰記にも「柿本紀僧正(眞済)は日本第一の天狗となりて愛宕山の太郎坊と申也」などあり。それ以下、愛宕山太郎坊を日本一の大天狗としたる記録多し。**愛宕山樒が原**云て 夫木抄に出でたる曾根好忠の歌。但、原歌第二句「樒の原に」、第五句「跡だにぞなき」。樒の原は愛宕山中の古き地名と見えて古歌に詠まれたるが多し。**山路なし** 天和本元禄本共に「山跡無し」とあり。**さて車輪は如何に**云て 雪に車輪を埋められて動き得ぬことを無きかと嘲り云へるなり。**慢心の心跡**云て 車僧の車は没せらるゝも天狗の慢心の心の路は雪などに没せられずとなり。**無著法欲心に**云て 俗事に執著せずして佛法を求めんと欲する心のみにては車は動くまじ、少し魔道にも心を寄せて雪に妨げられざる心の路を得よとなり。魔道は天狗道をさす。**善悪二つは**云て 出世間の佛法と世間法と、迷の煩悩と悟の菩提と覺者の佛と迷者の衆生と、佛法の車僧と天狗道の太郎坊と、詮ずる所、車の兩輪の如く善悪の二者兩々相對せるものなれば何れか優何れか劣、其行力を比べ合せんとなり。「兩輪」を「リヨオワ」と謡ひ慣はせるは音訓混淆にて面白からず、訂したきものなり。**不増不減** 車僧の答。汝

如何に害を加へんとすとし我に於て寸毫の減ずる所なし、亦汝我に論はんも相手とならず、あら面白の時節やと空嘯けるにより、面白の時節いふも相手とならず、あら面白の時節やと空嘯けるにより、面白の時節ならば行比べを止め、共に手を携へて嵯峨野に遊ばんと誘へるなり。**糸遊** かげろふに同じ、春の長閑なる日空中にちらく立ち上る氣。遊ぶといふより糸遊を出し、糸を引くを我心を牽く に掛け、遊ばゞ遊べ汝等に我心の牽き動さるゝことあらんやと推斷す。**標** 若き木立の枝。特にて若枝。**牛を打たば云々** 天狗の車を若てちに對し、車は打ちなりとて効無し、牛を打たば行くべしと嗤ふ。茲に牛を黙出せちは前に三車の喻を出せちに因みなり。**車はじなし云々** 天狗は又も愛太刀となり、いかなる車は無心のものなれば打ちなりとて行くまじ、さらば牛を打たんたも、その牛のなきを如何にせんとなり。**人牛の通** 車僧は更に一歩を進め、思ひがけぬ我汝人牛の通といふことを知らざるかと退窮せり。人牛の通とは蓋し支那の廓庵志遠禪師の十牛圖より取り来れるならんか。十牛圖は善人本来の面目を牛に喩へ、之を尋ぬるの順序と情得後の心得とを牧童の牛を尋ぬるに寄せて說きなるものにて、その中に「人牛俱に忘る」といふ圖ありて、牛に乘りて歸りたる牧童の牛自他を忘れたるを畫きたり。茲に見えなる牛といふも所謂本来の面目にして自性清淨の本心を指すものなるべし。**露地の白牛** 法華經三車の譬喩に門外の露地に大白牛車ありと說けるに基づき、碧巖集に「露地白牛、眼卓潮耳卓潮」の語あり、やはり本来の面目を指すなり。白牛を今は「ビヤクゴ」と讀へども古くは「白牛」打つて見せんと」とありて、牛字を「ギユウ」と讀みたり。禪門にては多くの場合「ゴ」と讀まず「ギユウ」と讀むなれはこも古語を善しとすべし。**足弱車** 輪の弱くして進行の遲き車。**浮世の嵯峨** さがは習はしの意の古語なれば、浮世の遲き車。嵯峨の山麓幸絶えたし芹川や千代の古道跡はあらとも」などあるを胸に置きて、嵯峨雪の古道跡ふかきと續く。**車のわだち云々** 車輪は大雪の后に雪を引き意にて足引に掛く。足引は山の枕詞なり。**雪の古道** 雪の降るを古道に掛く。後撰集に「嵯をくずりて得進まずといふをくてには直に山のことに用ひたり。**雪山の道** 雪の縁にて雪山を出す。雪山は釋迦の過去世に修行せし處なりといふ。**法の力** 車に乘るを佛法の法に掛く。**騒惑すれども** 天狗は魔道を以て正法を障害するぶを知らぬの意。**合掌** 手を合せて禮拜すること。

五番目ヨリ末
畧二番

車僧

十二月　シテ　天狗（前ハ山伏）
ワキ　車僧

ロ半次第上ツヨク

後の世知けて車僧。後の世知けて
車僧常寢の眠いつまで　上歌
日雲る。空ハ小倉の地取合ヤ降り
峯の雪。散るや嵯峨野の嵐山。龍の
郷音も聲そへて重なる雪の大井川。
筏の床のうき枕かたしく袖も白妙の。

空も程なく廻る日の。西山本よ著きよ
けり西山本よりきよけり。暫らく此處
よ車をとゝめ。四方の氣色を眺めすぎ
るもそは　シテ　いうよ車僧　ワキ　何事ぞ
シテ　浮世をば　ワキ　浮世をば何
ぞ廻る車僧。まだ輪のうちよおりと
とゝ見れ　ワキ　浮世をば廻らぬものを

ツレ　車僧。乘りも得るべきわづあらばとそ
シテ　乘りも得るべきわづあらばとそといふは
誰ぞ　ワキ　空洞風涼し　シテ　我ぐ名のみ
高雄の山よりとゝ立つる　ワキ　人ゝ愛宕の
峯よ住むか　シテ　さてお僧の住みかは
ワキ　一所不定　シテ　車ハいうよ　ワキ　必定の出車
シテ　廻れど　ワキ　廻らぬ　シテ　押せど　ワキ　押されぬ

●小謡

シテ　ワキ

らくも　ちもれぬ　シテカゝり上　車僧の　地上　三界（実人）

無安猶如火宅もとぞ。出でたる三つの。

車僧なれば。廻る道なる道ありけり

おう。乗り得たり乗り得たり。　上歌　見向

くく。心空なる雲水の。心空なる雲水の。

ふかだつ空も凄しく。嵐も聲ぞよ

愛宕山。嶺ぞよむまで響き合ひて。

車踏まれぬれども。我が住む方は愛宕山。

太郎坊が庵室よ。ありあれや車

僧。呼ぶぞうてやの山の黒雲よ乗りて。

ありけり黒雲よ乗りてありけり　来序中人

後シテサシ上　大ベシ　村上　愛宕山樒が原よ雪積り。花摘む人

の跡だよもなし。げよ雪中よ山路なし。

さて車輪いうよ。車僧。われ程貴き

者あらじと。慢心の心跡跡あらんや。
然らば無著法欲心よ。うくか移るか
車僧。魔道よりも。心を寄せよ車僧
善悪こうは両輪の如し　仏法あれば
世法あり　煩悩あれば。菩提あり
仏あれば衆生もあり　車僧あれば
左郎坊の行者もあり　祈らば祈
べし。行せば行徳も。劣るまじとよ劣
るまじとよ。いざ車僧。行較べせん
いろは坊ぐるとも。それも寄らじ
掌さじ。われいもとより不増不減。
あら面白の時節やあ　げに面白き
時節ならば。雲中よ車を廻らし。嵯
峨野の原をいざ遊ぜん　遊ぜ

遊べいとゆの。我が心をば引かれめや

シテ　などかハ引かであるべきと。給をゆり上げ

車を打つ　ワキ　あら車を打たば行くべ

きか。牛を打たば行くべしや　シテ　げにく

車ハ心なり。さて牛を打たんもあらば

ワキ　ここそ　ワキ　愚や。牛の道。見えたる

牛をば。なぜ打たぬ　シテ　見えたる牛とハ

さていかなるそもく牛ハ　ワキ　打つも行

かず　シテ　さてお僧の打たば行くべきか

ワキ　なるくの事。いでくさらば露地の

白牛を打つて見せんと。掃子を上げて

地上　虚空を打てば　不思議やなとの

車の。不思議やなとの車の。ゆるぎ廻

りて。今までハ。足弱車と見えつるが。

●獨吟仕舞

牛もなく人もうちぬよやまくと遣り
かけて飛よ。車そぞりたりける（上）
ロンギ上
小車の。山の陰野の道まがら。法の
道のべ遊行して。貴賤の利益なま
とやシテ上・處から。こゝ浮世の嵯峨山
なれや。雲の古道跡絶き。車の轍ハ
足ずの。大雲よハよも行かゞ
地上げよ

地柏子 法の。（ヤ）上モ
地柏子 山河を 上モ
地柏子 貴や姿りやと。魔障を 上モ

雲山の道なりと。法の車路平かよ
シテ行くか行かぬか此原の 地草の小車
雨そへて シテ打てゞも行かゞ 地止む
シテれゞ道む 地法の力とて。
嵯峨小倉。大井嵐の。山河を飛び翔
て。日ヤ惑まれゞも驚かばとて。眞よ
寄特の。車僧かな。あら貴や恐ろ

地拍子
ここ、ニ、ニ、ニ、ずこ、
合掌ーしてこそ。
又
ここ、ニ、ニ、ニ、ずこ、
合掌ーしてこそ。
又
ここ、ニ、ニ、ニ、ずこ、
合掌ーしてこそ。
又
ここ、ニ、ニ、ニ、ずこ、
合掌ーしてこそ。
又
ここ、ニ、ニ、ニ、ずこ、
合掌ーしてこそ。

やと。魔障を和らげ、大天狗の合掌してこそ。失せよけれ。

觀世流改訂謠本
第四版・大正版

大正十年九月十日印刷
大正十年九月十五日發行

訂正者兼
相續者　丸岡桂
丸岡明

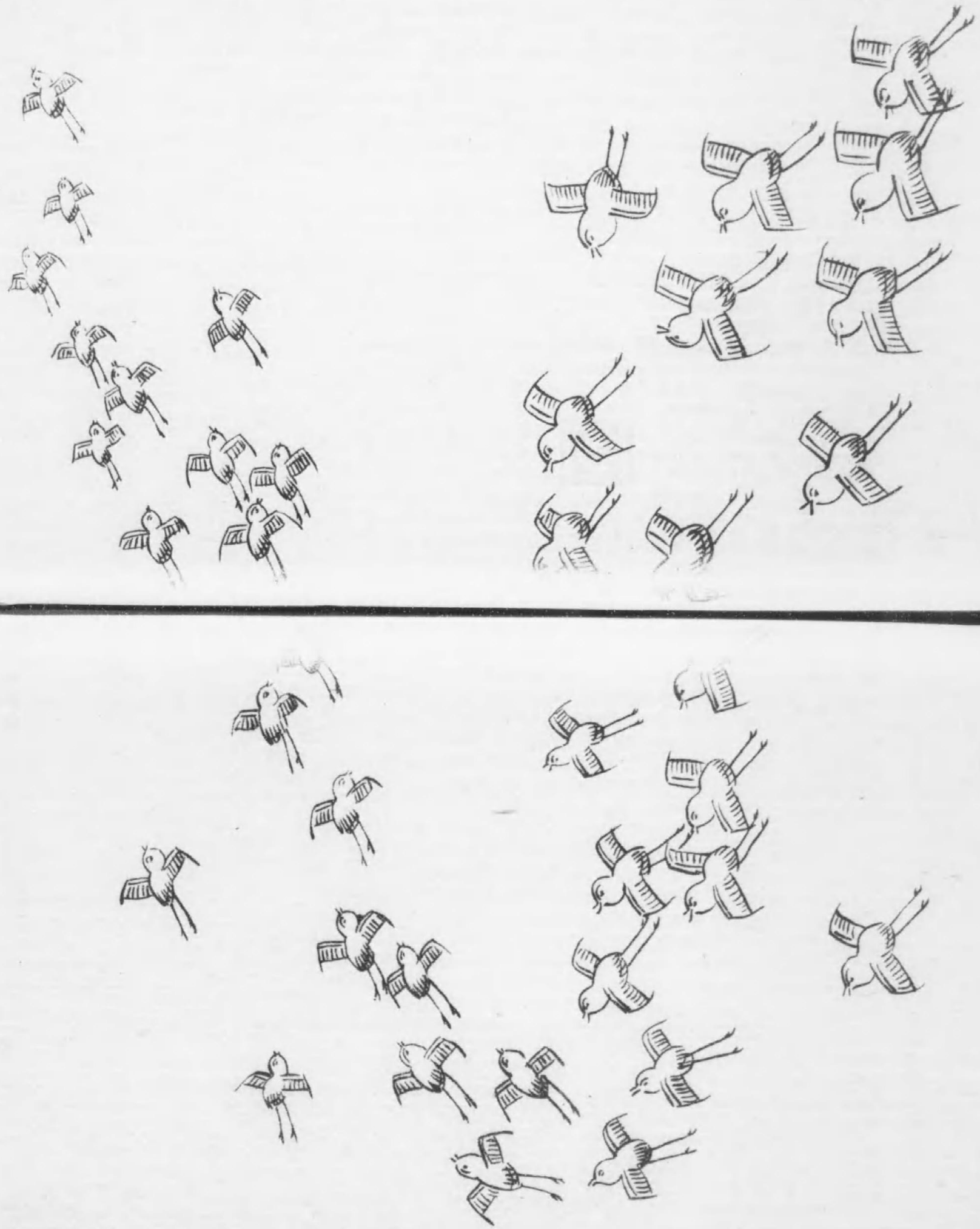
東京市神田區今川小路三丁目九番地
發行者　土屋源太郎

東京市神田區東松下町十二番地
印刷者　鈴木彌作

東京市神田區東松下町十二番地
印刷所　信英堂印刷所

東京市神田區今川小路三丁目九番地
發行所　觀世流改訂本刊行會
電話九段二三〇五番
振替東京一三四七五番

滿鉄圖書館藏



終